おばさん

田渕靖章

人物

浜村淳　（15）中学生
浜村亮介　（12）小学生
古谷賢太　（15）亮介の同級生
古谷秀樹　（25）賢太の兄
古谷治郎　（68）賢太のおじさん
矢部貴弘　（42）会社員
古谷恵子　（45）古谷兄弟の母親
浜村麻美　（42）浜村兄弟の母親
カッパ淳　（15）淳の変化後
古谷賢太中年女性（58）賢太の変化後
古谷秀樹中年女性（45）秀樹の変化後
古谷治郎中年女性（44）治郎の変化後
矢部貴弘中年女性（48）矢部の変化後
中年女性A～Z

○浜村家・リビング（朝）

浜村淳（15）、浜村亮介（12）、ソファーに座って、飢えたように食パンを食べている。

家の時計が8時を示す。

鐘の音が8回鳴り始める。

淳、立ち上がって棚の前に向かう。

何も置かれていない。

淳「あれ」

と、周囲を探す。

亮介「どううしたの？」

淳「アレルギーの薬がないんだ」

亮介、食事を中断して、棚の元に行き、一緒に探す。

浜村麻美（45）、扉を開けて、そこから直立の姿勢で無表情に淳と亮介を見る。

淳「あっ、お母さんおはよー。俺の薬がないんだけど、知らない？」

麻美、黙って淳と亮介を見ている。

淳「お母さん？」
麻美「薬がないって何様のつもり？」
淳、亮介、呆然とする。
麻美「薬がないって何様のつもり？」
淳、亮介、呆然と麻実を見ている。
麻美「何様だこのクソガキ！」
と、近くにある物を手に取り淳に向かって思い切り投げる。
背後の壁にぶつかり、壁に穴が開く。
淳「おっ、お母さんどうしたの？」
麻美「黙れこのクソガキが！」
と、全力で淳に向かって走る。
淳、亮介、廊下に逃げる。

○浜村家・1階廊下（朝）
淳、亮介、廊下を走って来ると、階段を駆け上がって行く。
麻美、全力疾走で追いかけて来る。

○浜村家・廊下（朝）

淳、亮介、逃げるように階段を登って来ると、急いでその先の扉を開けて中に入る。

○浜村家・子供部屋（朝）

淳、扉の鍵を閉めると、後ずさりするように扉から離れる。

亮介、その隣で怯える様に扉を見ている。

亮介「お母さんどうしちゃったの？」

淳「解らないよ」

麻美、外から扉を開けようと激しくノブを回してドアを動かす。カギがかかっていて開かない。

静かになる。

すると、外から何か硬い物を使って、扉を思い切り叩いて破壊し始める。

亮介「あー！」

と、両手を震わせる。

扉が少し割れて穴が開く。

麻美、その隙間から怒った表情で覗く。

麻美「クソガキ！」

淳、部屋の窓を開ける。

淳「速く逃げるよ！」

と、亮介と窓から外に出て行く。

○浜村家の外（朝）

淳、亮介、裸足のまま浜村家１階の屋根から、パイプを伝って下に降りる。そのまま、走り去って行く。

麻美、２階の開いた窓から顔を出す。

麻美「待てこのクソガキがー！」

と、急いで引き返す様に窓から離れる。

数秒が経過する。

麻美、裸足で浜村家の扉から飛び出すように出て来ると、全力疾走で淳達を追いかけて行く。

○住宅地・通路（朝）

淳、亮介、走って来ると、高い塀がある一軒家の庭の中に逃げ込む。

○一軒家・庭の中（朝）

淳、亮介、壁を背にして隠れる。

麻美の声「出て来いクソガキー！」

その声が近づいて来る。

麻美の声「どこだクソガキ！出て来い！」

淳、家の吹き出し窓を見る。

その先の廊下に立っている中年女性A、淳と亮介を無表情に見ている。

突然、吹き出し窓を開ける。

手をメガホンのようにして口に当て、上を向く。

中年女性A「（大声）奥さーん！ここにクソガキが隠れてるわ！藤川の表札の家よ！」

麻美の声「このクソガキがー！」

中年女性A、淳と亮介の元に走る。

淳、亮介、急いで庭の外に逃げ出す。

中年女性Ａ「（大声）外にクソガキが逃げ出したわー！」

と、全力で追いかけて行く、

○住宅地・通路（朝）

淳、亮介、必死に走って逃げている。

中年女性Ａ、背後から全力疾走で追いかけてくる。

中年女性Ａ「待てクソガキ！」

麻美、その後ろから走って来る。

○マンションの前（朝）

淳、亮介、走って来ると、マンションを通り過ぎて行く。

子供Ａ、マンションの敷地から逃げる様に走って出てくる。

淳と亮介を追いかけて走って来る中年女性Ａ、子供Ａの方に向かうと、子供Ａの髪を掴んで捕まえる。

子供A「あー！」

淳、亮介、立ち止って振り返る。

包丁を持っている中年女性B、怒った表情でマンションの敷地から裸足で出てくる。

中年女性A「奥さんクソガキはここよ！」

中年女性B、中年女性Aを見ると、立ち止まって笑顔を見せる。

中年女性B「わざわざすいませーん」

と、お辞儀をする。

中年女性A「いえいえ、お互い様ですよー」

中年女性B「ありがとうございますー」

と、子供Aの元に行く。

子供A「お母さんやめて……」

中年女性A「ジタバタすんじゃね！このクソガキが！」

中年女性B、包丁を振り上げる。

淳、亮介、目をそらす様に背を向け、全力で走って逃げて行く。

○駐車場（朝）

車が沢山停まっている。

淳、亮介、出入り口から息を切らして入って来ると、車の陰に隠れる。

激しく息切れをする。

淳「お母さんだけじゃない。みんなおかしくなってる」

亮介「これからどうするの？」

淳「とりあえず、古谷の家に行こう」

亮介「古谷？」

淳「友達だよ。今親が実家に帰ってて、1人で留守番してるはずだ。そこしかない」

亮介、怯えながら頷く。

遠くから声が響いてくる。

中年女性の声「（大声）あーきーひーさー！あーきーひーさー！早く出て来いこのクソガキが！」

亮介、泣きそうに両耳を塞ぐ。

○川沿いの歩行者道（朝）

淳、亮介、歩行者道にある植木の裏をかがんで移動している。

中年女性の声「（大声）うるさい！うるさい！うるさい！」

淳、亮介、植木の隙間から外を覗く。遠くにいる中年女性、鉄パイプを振り上げ、何度も振り下ろしている。物陰で何を叩いているのかが見えない。

淳「早く行こう」

と、亮介と足早にその場から離れる。

○マンションの敷地（朝）

淳、亮介、周囲を警戒しながら出入り口から入って来る。そのまま、マンションのエレベーターホールの方へ向かう。

○エレベーターホールの前（朝）

淳、亮介、オートロックの前にやって来る。

淳、機械に１４０２と数字を押して、呼び出しというボタンを押す。
呼び出し音が数回なる。
賢太の声「おー浜さん！」
淳「古谷！古谷の家は大丈夫か？」
賢太「大丈夫って、いつも通りだけど？」
淳「古谷以外誰もいないよな？」
賢太「いないけど……、どうしたの？」
淳「とりあえず早く入れてくれないか？」
賢太の声「解った」
オートロックの開く音がする。
淳、亮介、扉を開けて中に入って行く。

○エレベーターホールの中（朝）
窓のついているエレベーターの扉が３戸並んでいる。
淳、亮介、やって来ると、エレベーターのボタンを押す。
亮介「おばさんが乗ってたりしない？」

淳、表情を硬直させる。

淳「だっ、大丈夫だよ……」

と、表示を見上げる。

表示されている数字が下がって来る。

エレベーターの扉の窓には、誰も乗っていないエレベーターが下りて来て、扉が開く。

淳、亮介、安心するように一息つく。

淳、亮介、乗り込むと、閉まるボタンを押して扉を閉める。

窓から、淳と亮介の乗せたエレベーターが上がって行くのが見える。

○エレベーターの中（朝）

淳、亮介、扉の方を向いている。

扉の窓からは、誰もいないエレベーターホールを次から次へと通過していく光景が見えている。

淳、表示を見上げる。

6階から7階へと表示が移動して行

く。
淳、表示から目を離して窓を見る。
窓の外は暗闇、そこから8階のエレベーターホールが見える。通過すると闇に包まれる。9階のエレベーターホールが見えて来ると、そこに中年女性Cが立っている。
中年女性C、淳の方を見ると、顔を動かして追いかけ、突然、背を向けて階段の方へ走り出す。
亮介「あーっ！」
と、扉から離れる。
窓は暗闇に包まれる。
窓から、誰もいない10階のエレベーターホールが見えて来る。
中年女性C、怒った表情で階段の方から窓の前に走って来てボタンを押す。
扉は開かず、そのまま通過して行く。
中年女性C、怒った表情で睨む。

中年女性C「このクソガキー！」
と、背を向け、階段の方に走って行く。
淳「早く行け早く行け」
表示が12階から13階へ移動する。
窓の外に14階のエレベーターホールが現れ、チンという音と共に停止する。
淳「早く早く！」
扉が開く。
階段を駆け上がって来る音が近づいて来る。
淳、15階のボタンを押し、閉まるボタンを連打するように数回押してから、亮介と急いで外に出る。

○マンション・14階・廊下（朝）
淳、亮介、走って1402号室の前にやって来ると、インターフォンを押す。
落ち着かないように走って来た道を警戒するようにチラチラ見る。

１４０２号室のカギの開く音がする。
淳、強引に扉を開けて、急いで亮介と中に入ると、勢い良く扉を閉める。

○１４０２号室・玄関・内側（朝）
淳、急いで鍵を閉めてチェーンをかける。
亮介、その隣で怯えている。
古谷賢太（１５）、呆然と２人を見ている。

賢太「きょっ、今日はどうしたの？」

○１４０２号室・子供部屋（朝）
淳、亮介、賢太、床に座っている。

賢太「おばさんが追いかけてるって、何したの？」

淳「何もしてないよ。外を見てみろよ。おばさん達がそこら中で子供を襲ってるんだ」
賢太、嬉しそうに笑う。

淳「嘘じゃないんだって。俺のお母さんも、知

らないオバサン達も俺達に襲いかかって来たんだよ！」

賢太、嬉しそうに頷くが、淳と亮介の汚れた足を見て眉を潜める。

○１４０２号室・風呂場（朝）

淳、亮介、シャワーを使って足を洗っている。

○１４０２号室・台所（朝）

淳、亮介、秀樹と向かい合うようにテーブルに着いている。

賢太「じゃあ、この近所のオバサン達はみんなおかしくなってるの？」

淳、頷く。

賢太「ありえないよ」

淳「だから本当なんだって」

と、亮介を見る。

淳「なー亮介」

亮介、頷く。

インターフォンが鳴る。
淳、亮介、賢太、受話器の方を見る。
賢太「誰だろう」
と、立ち上がる。
淳「出ちゃダメだ！」
賢太「え？」
と、呆然と淳を見る。

○１４０２号室・リビング（朝）
賢太、淳、亮介、インターフォンの受話器の前にやって来て、画面を見る。
画面には、中年女性Ｃ、中年女性Ｄ、映っている。
淳「さっきのおばさんだ！」
亮介、怯えだす。
賢太「これ、どうみても普通の人だよ？」
淳、急いで受話器を押さえる。
賢太「別に出ないって」
中年女性Ｄ、扉の横にある電気メーターを覗く。

淳「何してんだ？」
賢太「メーターを見てる……」
淳「中に人がいるかを確認してるんだ！」
賢太、表情が硬くなる。
中年女性Ｃ、電気メーターから離れると、中年女性Ｄと何かを話す。
中年女性Ｃ、扉に耳を当てて音を聞く。
賢太、画面を見たまま呆然とする。
中年女性Ｃ、耳を離すと、中年女性Ｄと何かを話し合ってから、離れて行く。
賢太、硬直した表情で淳と顔を合せる

○マンション・１４階・廊下（朝）
中年女性Ｃ、中年女性Ｄ、１４０３号室の前に立っている。
インターフォンから聞こえてくる声。
中年女性Ｅの声「はい」

中年女性C「おはようございます。お聞きしたい事があるんですが」
中年女性Eの声「はい。なんでしょうか？」
中年女性C「実は、このマンション内にクソガキが姿を現したんです」
インターフォンの切れる音がする。
中年女性E、険しい表情で扉を開ける。
中年女性E「クソガキがマンションに？」
中年女性C「（小声）そうなんですよ。さっきエレベーターに乗ってたのを見たんです。15階まで行ったみたいなんけすけど、そこから姿が見当たらなくって」
中年女性E「（小声）じゃあ、このマンション内のどこかにいるのね？」
中年女性C、小刻みに何度も頷く。
中年女性E「（小声）早く見つけだしてコテンパンにしないと！管理人さんに連絡は？」
中年女性C「（小声）それがまだなの。行こうと思ってるんだけど、この辺りに潜んで

るかもしれないから目が離せなくって」
中年女性E「(小声)なら私が行くわ」
中年女性C「(小声)それ助かりますー」
中年女性E「(小声)こうやって話してる間に逃げられたら大変よ」
中年女性C「(小声)そうですね、じゃあ、私達はこの辺りを探すんで、管理人さんへの報告はお願いできます?」
中年女性E「(小声)任せて。あっ、ちょっと待って!」
と、家に戻る。扉が閉まる。
中年女性E、少しすると、3本の包丁を持って出てくる。
中年女性E「(小声)これ使って」
と、包丁を差し出す。
中年女性C「(小声)助かるわー」
と、中年女性Dと包丁を受け取る。
中年女性E「(小声)じゃあ、早く見つけ出して血祭にあげましょう」
と、家から出ると、鍵を閉め、走ってエ

レベーターホールに向かう。
中年女性C、中年女性D、隣の部屋の前に行き、インターフォンを押す。

○1402号室・リビング(朝)
淳、亮介、賢太、ソファーに座っている。

賢太「とりあえず、家から出ない方がいい」
淳「だけど、そんなに長くはいれないだろ」
賢太「そうだな。あさってには親が帰って来るし。それまでには帰ってもらわないと」
淳「帰ってもらうって……古谷は？」
賢太「ここは俺の家だし」
淳「何言ってんだ、今のおばさん達は子供を見たら襲ってくるんだ」
と、体を痒そうにかき始める。
賢太「俺の親は大丈夫だ」
淳「そんな訳ない。外を見てみろよ！」
お知らせの音楽が鳴り響く。
中年女性の声「管理事務所からのお知ら

せです。このマンション内にて、クソガキがエレベーターに乗って１５階に向かう姿が目撃されました。現在もこのマンション内のどこかに潜んでいると思われます。ご自宅にある包丁などの道具を用意して、十分に備えてください。また、発見した場合、すぐに管理事務所に連絡してください。現在、監視カメラの映像を調べて行方を追っています。情報が解り次第報告します。繰り返します」

○マンション・１４階・廊下（朝）

パジャマ姿の中年女性Ｇ、１４０５号室の扉を開けて、廊下に出て来る。手すりを持って、マンションの敷地を探すように見下ろす。

中年女性の声「このマンション内で、クソガキがエレベーターに乗って１５階に向かう姿が目撃されました。現在もこのマンション内のどこかに潜んでいると思われます。ご

自宅にある包丁などの道具を用意して、十分に備えてください。また、発見した場合、すぐに管理事務所に連絡してください。現在、監視カメラの映像を調べ行方を追っています。情報が解り次第報告します。以上、管理事務所からのお知らせでした」

お知らせの音楽が鳴り響く。

中年女性G、廊下から敷地を探すように見下ろす。

家に中に戻って行く。

○１４０２号室・リビング（朝）

淳、亮介、賢太と向かい合って立っている。

淳「古谷、これで解っただろ」

賢太、小刻みに頷く。

賢太「今すぐここから避難しないと」

淳「今すぐ？ここに隠れておいた方がいい」

賢太「監視カメラの映像を調べるって言って

た」
淳「どこまで映ってるの？」
賢太「全部だよ。前にやり過ぎだって問題になったんだ。だからエレベーターの中から、全ての階の廊下まで映ってる」
淳「じゃあ、俺と亮介がこの部屋に入って来た所も？」
賢太、小刻みに頷く。
淳「速く逃げないと！」
亮介「出たくないよ！外にはおばさん達が沢山いるよ！」
淳「だけどここにいたら、そのうちおばさん達が乗り込んでくるよ」
亮介、泣きそうになる。
賢太「いや、いい方法がある」
淳「いい方法？」
賢太「警察に電話すればいいんだ」
淳「そうだ！その手があった！」
賢太、急いで電話機の元に行き、番号を押して受話器を耳に当てる。

呼び出し音が数度鳴る。
中年女性の声「はい。百当番です」
賢太「早く助けに来てください。おばさん達に狙われてるんです」
少し間があく。
賢太「もしもし？もしもし？」
中年女性の声「（低い声）あなた今何歳ですか？」
賢太「１５歳です」
中年女性の声「（低い声）１５歳……。今隠れているんですか？」
賢太「はい。３人で家に隠れてます」
中年女性の声「（低い声）３人も……。じゃあ警察がすぐに行きますので、お名前と住所を教えてください！」
賢太、突然、表情を硬直させる。
中年女性の声「（低い声）もしもし！もしもし！聞こえてますか！」
淳、賢太を見て眉をひそめる。
中年女性の声「このクソガキ！さっさと答え

ろ！」

賢太、受話器を叩きつける様に置く。

賢太「警察もオバサンだ……」

淳「警察まで？」

電話機が、普通よりも激しく間を開けずに呼び出し音を響かせる。

賢太、淳、亮介、驚くように電話機を見る。

○マンション・１４階・廊下

１０人程の中年女性達、包丁やハサミ、アイスティック、こん棒などを手に１４０２号室の前に歩いて来る。

○１４０２号室・寝室

部屋には誰もいない。

吹き出し窓からベランダが見える。

包丁を持っている中年女性２人、横から現れると、窓から部屋の中を覗く。

リビングの吹き出し窓の方に移動する。

すぐに、リビングの吹き出し窓が割れる音が響く。

中年女性の声「クソガキー！」

包丁を持った中年女性達３人、リビングの方へとベランダを横切って行く。

○住宅街・通路

淳、亮介、賢太、古谷のマンションを背に走っている。

○住宅街・細い路地

淳、亮介、賢太、走って来る。

正面から、ママチャリに乗った中年女性、角を曲がって走って来る。

淳、亮介、賢太、全力疾走で引き返す。

○住宅地・酒屋の前

淳、亮介、賢太、走って来ると、自動販売機の後に隠れる。

中年女性の声「クソガキー！」

と、ママチャリに乗った中年女性、一瞬で横切って行く。

○自動販売機の裏側

賢太、通路の方を覗いている。

淳、亮介、隠れている。

賢太「行ったみたいだな」

と、亮介と賢太の元に戻って来る。

賢太「おばさんって、こんなに怖かったのかよ」

淳「あんなもんじゃないよ。古谷の家に来るまでの間、刃物や鉄パイプで子供を襲ってるおばさんを何人も見た。早く安全な場所を見つけないと、俺達もやられるよ」

賢太、ポケットからスマートフォンを取り出し操作する。

淳「誰にかけるの？」

賢太「俺の兄貴。今、田舎で農業をしてるんだ。そこなら多分安全だ」
と、スマートフォンを耳に当てる。
呼び出し音が鳴り続ける。
スマートフォンを耳から離す。
賢太「繋がらない」
淳「なら、ちょっと貸してくれないか？」
賢太、スマートフォンを渡す。
淳「お父さんに電話してみる」
と、番号を入力して、スマートフォンを耳に当てる。
呼び出し音が数回なる。
中年女性の声「もしもし？」
スマートフォンを耳から離して、電話を切る。
淳「なんでおばさんが出るんだ……」
亮介、賢太、呆然と淳を見る。
○小さな自転車屋の前
賢太、淳、亮介、やって来ると、店の

中を覗く。
自転車が並んでいて、誰もいない。
賢太「やっぱりだ」
と、近くに落ちているコンクリートを拾う。

○自転車屋・店内
ガラスの割れる音がする。
賢太、サイクリング車の元にやって来て自転車に触れる。
淳、亮介、マウンテンバイクコーナーにやって来て、自転車に触れる。
賢太「ダメだ、ペダルも外れてるし、ブレーキも調整されてない」
淳、マウンテンバイクのタイヤを触る。
淳「空気もほとんど入ってないよ」
賢太「これじゃあ乗っていけない」
淳、周囲を見渡す。
修理スペースの近くに並べられている2台のママチャリ。前と後に子供様の

座席が備え付けられている。
淳、ママチャリの元に行き、ブレーキとタイヤの確認をする。もう1台の方も同じ様に確認する。
淳「古谷、ここの自転車は大丈夫そうだ」
賢太、ママチャリを見て嫌そうにする。
賢太「そっ、それか……」
と、嫌そうにママチャリの元に歩く。

○小さな自転車屋の前
淳、亮介を後ろに乗せたママチャリに乗って出てくる。
賢太、その後からママチャリに乗って出て来る。
そのまま道路を走り去って行く。

○広い通路
淳、亮介を乗せてママチャリを走らせている。
賢太、ママチャリに乗ってその隣を走っ

ている。

淳「さっき自転車屋さんの中を見て、やっぱりって言ってたけど？どういう意味？」

賢太「あの自転車屋さん、普段はおじさんとおじいさんの２人でやってるんだ」

淳「それがどうしたの？」

賢太「大人の男が消えてる」

淳「そう言えば……そうだ……」

○河川敷（夕方）

夕日が出ている。

舗装された長い通路が続いている。

その左右に、視界を塞ぐ伸びた草が生えている。

亮介を後ろに乗せた淳、前を走る賢太、ママチャリを走らせている。

賢太「ここだ」

賢太、淳、ママチャリを停車させる。

賢太、ママチャリから降りて、ママチャリを押して草の中を進んで行く。

淳、同じようにして進んで行く。

○川の前（夕方）

夕日の下、川が流れている。

その前を小さな砂場が広がっている。

賢太、ママチャリを押して草村から出て来る。

淳、その後から、亮介を乗せたママチャリを押して出て来ると、賢太の隣で立ち止まる。

淳「ここならおばさん達は来なさそうだな」

賢太「秘密基地だよ。でも、朝になれば後ろの通路をおばさん達がウヨウヨしだすんだ」

淳「よく考えたら、俺達はおばさんが多い一番危険な時間に移動してたんだな」

賢太「そうだなー」

淳「なら、おばさんのいない夜に動けば、もっと安全に移動できたんじゃない？」

淳、賢太と気づいた様に顔を合

せる。

○河川敷（夜）

人気がない道が延々と続いている。

虫の鳴き声が聞こえている。

○川の前（夜）

淳、亮介、賢太、砂浜の上で横になって眠っている。

賢太、目を覚ます。

慌てる様に起き上がり、ポケットからスマートフォンを取り出し画面を見る。

２３時３０分と表示されている。

急いで淳を揺さぶる。

賢太「おい、起きろ淳！」

淳、眠たそうに目を覚ます。

賢太「もう１１時半だ」

淳「え！」

と、起き上がる。

賢太「早く移動しよう。間に合わなくなる」

淳、眠っている亮介を起こす。

淳「亮介、そろそろ行くぞ。亮介」

亮介、眠たそうに起きる。

○河川敷（夜）

賢太、亮介を後に乗せた淳の順に、猛スピードでママチャリを走らせている。

○河川敷の出口（夜）

賢太、後ろに亮介を乗せた淳、車止めの門の横を通り抜ける。

その先に見える、軽自動車が停まっている通路を走り抜けて行く。

○川沿いの通路（夜）

亮介を後に乗せた淳、賢太、並んでママチャリを走らせている。

軽自動車、猛スピードで突っ込んで来る。

淳、賢太、そのエンジン音を聞いて振

り返ると、急いで左右に避ける。
その間を軽自動車、通り抜けて行く。
淳、賢太、バランスを崩して転倒する。
軽自動車、急停車する。
中年女性F、軽自動車の助手席から降りると、倒れている賢太の元に全力疾走する。
中年女性G、運転席から降りると、賢太の方に向かって全力で走る。
賢太、淳、亮介、急いで起き上がって、走って逃げる。
中年女性F、賢太の髪を掴む。
中年女性G、走って来ると賢太に飛び蹴りをする。
賢太「あー！」
淳、亮介、立ち止って賢太の方を見る。
中年女性F、中年女性G、賢太に殴る、蹴る、ひっかくの、激しい暴行を加える。

淳「古谷ー！」

と、使えそうな物を探すように周囲を見渡し、賢太のママチャリの元に走る。

ママチャリを両手で持った状態で、中年女性F、中年女性Gに体当たりする。

中年女性F、中年女性G、賢太、バラバラに吹き飛ばされて地面に倒れる。

ママチャリ、地面に落ちる。

淳「古谷！早く！」

賢太、急いで立ち上がると、淳と逃げて行く。

中年女性F、中年女性G、少し遅れて立ち上がる。

中年女性F「このクソガキが！」

と、中年女性Gと淳達を追いかける。

○橋の前・南側（夜）

川沿いの直線道の横に、大きな橋が架かっている。
淳、亮介、首から血が出ている賢太、川沿いの道を走って来ると、立ち止まって、息を切らす。
淳「なんとか逃げ切れたね」
と、賢太を見る。
淳「古谷、首から血が出てるよ！」
賢太、自分の首に触れ、それを見る。手には血がついている。
賢太「爪でやられたんだ。軽い切り傷だよ。それにしても、あんな力のあるおばさん始めてだよ」
淳「多分、異常な位怒ってるからだろうな」
賢「だからあんなに強くなるのか？」
淳「多分ね。でも、なんで子供を見ただけであんなに怒り出すんだろう。こっちは何もしてないし、昨日までは普通だったのに」
亮介「解らないけど、またどこからか襲って来ないかな？」

淳、亮介、賢太、周囲を見渡す。
淳「不気味だね。早く行こう」
と、亮介、賢太とランニングするように、橋を渡って行く。
静かになる。軽自動車、川沿いの直線道を猛スピードで走って来ると、そのまま走り去って行く。

○橋の前・北側（夜）
近くに倉庫のような建物がある。
淳、亮介、賢太、ランニングするように橋を渡り終える。
息を切らして立ち止まる。
淳「やっぱり自転車がないとダメだ」
淳、亮介、賢太、周囲を見渡す。
賢太「だけどこの雰囲気、どこにもないぞ。自転車……」
突然、賢太のポケットから着信音が響き渡る。
淳、亮介、賢太を見る。

賢太、ポケットからスマートフォンを取り出し、画面を見る。

賢太「お母さんからだ」

淳、亮介、不安そうな表情を浮かべる。

賢太、スマートフォンを耳に当てる。

恵子の声「もしもし、賢ちゃん？」

賢太「おっ、お母さん？」

恵子の声「あー良かったー。賢ちゃん今どこにいるの？」

賢太「今……」

と、黙る。

恵子の声「もしもし？もしもし？」

賢太「聞こえてるよ」

恵子の声「なんで何も言わないの？どこにいるの？」

賢太「お母さん」

恵子の声「なに？どうしたの？」

賢太「俺を心配して電話をかけてきたの？」

恵子の声「当たり前でしょ。今家に帰って

来たら、どこにも賢ちゃんがいないから、何があったのか心配でかけたんじゃない」

賢太、安心するように息を吐く。

淳を見て大丈夫だと示すように頷く。

恵子の声「もしもし？もしもし？」

賢太「聞こえてるよ。僕なら大丈夫。だけど近くにおばさんがいるんだ」

恵子の声「おばさんが近くにいるって、茨城のおばさんの所にいるの？」

賢太「知らないおばさんだよ」

恵子の声「えー？どういう事？何で知らないおばさんといるの？」

賢太「街中で子供を襲ってるおばさんだよ」

恵子の声「賢ちゃん何を言ってるの？」

賢太「お母さんは気づいてないの？街中でおばさん達が子供を襲ってるんだ」

恵子の声「気づくも何も、今日はずーっとおばあちゃんの家にいて、今帰って来た所なの。だから外の事は解らないわ。だけど、そんな事が起るなんて、いくら賢ちゃんの言

う事でも、ちょっと信じられなわ」
賢太「それでだ！」
と、スマートフォンを耳から離して淳を見る。
賢太「俺のお母さんは遠くへ行ってた。だからおかしくなってない」
淳「って事は、他の場所は安全？」
賢太、頷くと、スマートフォンを耳に当てる。
恵子の声「もしもし？もしもし？」
賢太「聞こえてるよ」
恵子の声「今誰かと話してたみたいだけど、1人じゃないの？」
賢太「淳君と亮介君の3人だよ。そんな事よりお母さん、お父さんは無事だよね？」
恵子の声「当たり前じゃない。今下にいるわ。もうすぐ車に積んでる荷物を持って上がって来る所よ」
賢太「じゃあ、今すぐお父さんと迎えに来て、僕達をおばあちゃんの家に連れて行っ

て」
恵子の声「今からおばあちゃんの家って、どういう事？詳しく話してくれない？」
賢太「だから、今言った通りだよ。おばさんが暴れてるんだ。そのマンションも危険なんだ。それに、何度も襲われたし、俺、怪我もしてるんだよ」
恵子の声「なんですって⁉」
賢太「血も沢山出たよ。あと痛いよ」
恵子の声「急いで行くから場所を教えて」
賢太「大川大橋の前だよ」
恵子の声「そんな遠くまで……」
賢太「オバサンから逃げて来たんだよ」
恵子の声「ただ事じゃないみたいね。今すぐお父さんと一緒に迎えに行くわ」
賢太「頼むよ。早くして！」
恵子の声「近くに着いたら連絡するわね」
賢太「解った」
恵子の声「じゃあ待ってて。切るわよ」
賢太「うん」

通話の切れる音がする。
賢太、スマートフォンを耳から離す。
賢太「もう大丈夫だ。お母さんとお父さんが車で迎えに来てくれる」
淳、安心するように肩の力を抜く。
賢太「それまで安全な場所に隠れておこう」
と、淳、亮介と周囲を見渡す。
淳、近くの倉庫を指差す。
淳「あの上とか良さそうじゃない」
賢太「やっぱりそうだよな」
淳、亮介、賢太、倉庫の元に行き、屋根に登って行く。

○橋の前・大きな倉庫の屋根の上（夜）
橋と交差する道路が見える。
淳、賢太、亮介、座って景色を眺めている。
淳「古谷のお母さんに会うの久しぶりだなー」
と、体を痒そうにかき始める。

賢太「淳はよく俺の家に来てたもんなー。すごい母親だっただろ」
淳「変わったお母さんだったよ。前日の残り物が腐るからって、俺にまで強引に食べさせるんだから」
賢太「泣いたよな。それで」
淳「そりゃお腹も減ってないし、家に帰ったら夕ご飯もあるから、いらないって言ったんだよ。なのに無理やり食べさせて、それで残したら怒るんだから」
賢太、淳、亮介、笑う。
淳「ありゃ虐待だよ」

○橋の前・北側（夜）
道路から倉庫が見える。その屋根にいる淳、賢太、亮介の姿は見えない。
賢太の声「だからみんな俺のお母さんに泣かされたんだよ」
賢太、淳、笑う。
淳の声「恐かったよなー。古谷のお母さん。

でも今は全く怖いと思わない」
賢太の声「他のおばさん達が怖すぎるからな」
淳が体を強く激しくかく音が聞こえてくる。
賢太の声「淳、さっきから大丈夫か？」
淳の声「痒いだけだよ。痛くなってきた」
賢太の声「かきすぎだろ。少し我慢しろよ」
淳の声「できたら薬なんていらないんだよ」
賢太の声「そうだった。昔から薬飲んでたよな。今日は飲んでないのか？」
淳の声「飲む時間にお母さんが襲って来た」
賢太の声「じゃあ、もう丸一日飲んでないのか」
淳の声「そうだけど、もっと長い間飲んでない感じがする」
淳の体をかく音が激しく大きくなる。
○橋の前・大きな倉庫の屋根の上（夜）

淳、服をつまんで前後に動かして、体に風を送っている。
亮介、その隣に座っている。
賢太、後の方で横になっている。
下に見える風景が、遠くから来る車の照明に照らし出される。
亮介「あっ、車の光りだ」
と、淳と身を乗り出すように光りの方向を見る。
賢太、起き上がると、淳の隣に来て、そこから同じ方向を見る。
白、黒、銀のミニバンが3台、川沿いの道路を走って来るのが見える。
賢太「俺の家の車じゃない！」
賢太、淳、亮介、姿勢を低くし、身を隠しながら見る。
3台のミニバン、橋の前で停車する。
中から、包丁やナイフ、日本刀を持った中年女性達、降りて来る。
最前列の白いミニバンの助手席から、

古谷恵子（４４）、散弾銃を片手に降りて来る。
賢太、口を開けて呆然とする。
恵子、ポケットからスマートフォンを取り出すと、画面を操作して耳に当てる。
賢太のポケットの中のスマートフォンが振動する。
淳、亮介、賢太を見る。
賢太、スマートフォンを取り出し画面を見る。
操作して、ゆっくりと耳に当てる。
賢太「（小声）もしもし」
恵子の声「賢太、お母さんよ。今、橋の前に来たんだけど、どこにいるの？」
賢太、黙り込む。
恵子の声「もしもし？」
賢太「（小声）聞こえてるよ」
恵子の声「もしかして、反対側の方からし

古谷「(小声)そっ、そうみたいだね」
恵子「解った。今すぐ向かうから待っててね」
古谷「(小声)うん」
恵子、スマートフォンを耳から離し、
中年女性達の方を見る。
恵子「橋の反対側にクソガキがいるらしいので、これから向かいましょう」
中年女性H「本当、紛らわしいクソガキねー」
中年女性I「だからクソガキってクソなのよ。早くぶち殺さなくっちゃ」
恵子「本当にすいませーん。クソ産んで」
中年女性H「奥さんは悪くないですよ。そのクズの糞ガキが全部悪いんですよ」
恵子「ありがとうございます」
中年女性I「当然よー、ねー」
中年女性H「そうそう。本当にそれよー」
と、中年女性達と顔を合わせて、頷き合う。
賢太、額に手を当て、目を瞑って落ち込む様にうつむく。

男物の真っ赤なジャージを着た中年女性X（55）、白いミニバンの運転席から降りて来る。背中には、『三栗高等学校』と書かれている。

中年女性X「クソガキはどうなったの？」

恵子「橋の反対側にいるって」

中年女性X「じゃあ、逃げられる前に早くコテンパンにしに行かないと」

恵子「そうそう。早く行きましょう」

恵子、白いミニバンの助手席に戻る。

中年女性X、白いミニバンの運転席に戻る。

中年女性達、ミニバンに乗り込んでいく。

3台のミニバン、走り出すと、橋を渡って行く。

賢太、悲しそうに目を開ける。

淳「今のうちに、早くここから逃げよう」

淳、賢太、亮介、立ち上がって、屋根から降りて行く。

○川沿いの通路（夜）

淳、亮介、暗い表情の賢太、歩いている。

賢太のポケットから、スマートフォンの振動する音が聞こえてくる。

賢太「まただ」

と、淳、亮介と立ち止まる。ポケットからスマートフォンを取り出して、画面を見る。画面を操作して、重々しくスマートフォンを耳に当てる。

声がしない。

賢太「もしもし」

恵子の声「賢ちゃんどこにいるの⁉」

賢太、困ったように黙る。

恵子の声「賢ちゃん、お母さん今橋の所にみんなで来てるのよ」

賢太「みんなって……誰なの……」

恵子の声「お父さんよ」

賢太、黙る。

恵子の声「もしもし、聞こえてるの？」

賢太「お母さん、何があったの？」
恵子の声「何がって？何？」
賢太、口を噛みしめる。
賢太「散弾銃……持ってたよね」
沈黙が生まれる。
恵子の声「どこだクソガキー！」
その声がスマートフォンのスピーカーから、淳や亮介に聞こえるほど響く。
淳、亮介、驚く。
恵子の声「さっさと出て来い！　逃がさんぞこのクソガキがー！」
賢太、スマートフォンから耳を離す。
画面を操作して通話を切る。
落ち込むようにため息を吐く。

○川沿いの工場街・廃工場の前（夜）
淳、亮介、賢太、古くて汚い廃工場の前にやって来る。
淳「ここなら安全そうだな」
亮介「お化けが出そうで気持ち悪いよ」

淳「だからおばさんは出なさそうだろ」
亮介、戸惑いながらも頷く。
淳「行こう」
と、亮介、賢太と廃工場の方に向かう。

○廃工場・通路（夜）
薄暗く、不気味に静まりかえっている。
開いている窓から、淳、亮介、賢太、入って来る。

○廃工場・２階・通路（夜）
更衣室の扉が開いている。
淳、亮介、賢太、階段を上って来ると、開いた扉の中に入って行く。

○廃工場・２階・更衣室（夜）
扉が閉められている。
放置された物が少し置かれている。
淳、亮介、目を瞑っている賢太、横

になっている。

賢太「あー、頭がおかしくなりそうだ」

淳「俺も朝の事を想い出すと、今でもまだ信じられないよ」

と、体を痒そうにかき始める。

淳「でも、なんで古谷のお母さんは銃を持ってたの？」

賢太「おじいちゃんが猟友会に入ってるんだ。その銃を持ってるって事は、おじいちゃんもお父さんも妹も……」

と、黙り込む。

○川沿いの工場街・廃工場の前（朝）

廃工場が太陽の光に照らし出されている。周囲に人の気配はない。

○廃工場・２階・更衣室（朝）

窓から明るい太陽の光によって、室内が照らし出されている。

淳、亮介、賢太、眠っている。

賢太のポケットの中のスマートフォンが振動しだす。
賢太、眠たそうに目を覚ます。
ポケットからスマートフォンを取り出して画面を見る。
画面には、着信、古谷秀樹と表示されている。
驚いた様に起き上がり、急いでスマートフォンを操作して耳に当てる。
賢太「もしもしお兄ちゃん？」
秀樹の声「賢太か！」
賢太「そうだよ！お兄ちゃん早く助けに来て！おばさん達が狂暴になって子供を襲いだしてるんだ」
秀樹の声「やっぱりそうなのか」
賢太「そっちも同じ状態なの？」
秀樹の声「俺のいる所は問題ない。だけどさつき陽葵ちゃんから電話がかかってきた」
秀樹の声「陽葵ちゃんから！？」
秀樹の声「お前と同じ事を言ってる。だから

今、車で陽葵ちゃんを迎えに行ってる。その後すぐお前を迎えに行く。今どこにいるんだ？」

賢太「えっと、今は……」

と、周囲を見渡す。

○廃工場・2階・通路

静まりかえっている。

○廃工場・2階の倉庫

賢太、淳、亮介、黙って座っている。

外から、車がクラクションを2回鳴らす音がする。

賢太「お兄ちゃんの車だ」

と、立ち上がる。

○川沿いの工場街・廃工場の前

停車している、改造された高級セダン。窓に黒いスモークフィルムが張られていて、車内が見えない。

賢太、淳、亮介、廃工場の敷地内から、車の方へ走って来る。
賢太、後部座席の扉を開けて乗り込む。
淳、亮介を先に乗せてから、乗り込むと、扉を閉める。
改造車、走り出す。

○改造車の車内
古谷秀樹（２５）、運転している。
古谷陽葵（９）、助手席に座っている。
後部座席の賢太、亮介、淳。
秀樹「お前ら、いつから隠れてたんだ？」
賢太「今日の早朝ぐらいから」
秀樹「それまではどうしてたんだ？」
賢太「自転車でお兄ちゃんの家に」
秀樹「それで俺に着信があったのか。なるほどな。陽葵と同じだ」
賢太「陽葵ちゃんも逃げて来たの？」
陽葵、頷く。

賢太「おじいちゃんとおばあちゃんとお父さんはどうなったの？」
陽葵「いなくなってた」
秀樹「陽葵の話じゃ、家の中には母さんと、見た事のないおばさんが２人いたらしい」
賢太「２人も知らないおばさんが？」
秀樹「何が起こってるのかさっぱりだ」
と、顔を横に振る。

○国道
改造車、走っている。
周囲には、中年女性が運転している車だけが走っている。

○改造車の車内
運転している秀樹。助手席の陽葵。
後部座席の賢太、亮介、淳、窓の外を見ている。
窓からは、中年女性が運転している車が沢山見える。

淳「全部おばさんだ……」
亮介「なんでこのおばさん達は襲ってこないの？」
秀樹「このフィルムだよ。外からじゃ中が見えないんだ」
亮介、窓の外を見る。
窓の外に、優しそうな中年女性が運転している車が並んでいる。

○峠道（夕方）
改造車、車一台が通れる曲がりくねった細い道を走っている。
周囲は木や草に覆われている。

○古谷家の外（夕方）
舗装された細い通路の前に、塀に囲まれた大きくて古い古谷家が建っている。
その並びに、人の住んでいない同じような家が二件並んでいる。

改造車、通路を走って来ると、古谷家の横にある空間に駐車する。
運転席から秀樹、助手席から陽葵、後部座席から淳、亮介、賢太、降りる。

秀樹「心配いらない。他の家はあるけど、誰も住んでない」
全員、古谷家の方に歩いて行く。

○古谷家・玄関・内側（夕方）
広々としている。
秀樹、扉を開けて入って来る。
陽葵、淳、亮介、賢太、続いて入って来る。

○古谷家・リビング（夕方）
広々としてる。大きな棚に色々な物が置かれている。
秀樹、入って来ると電気をつける。
陽葵、賢太、亮介、淳、入って来る。

淳「広いなー」
秀樹「この辺りは田舎だからな。鍵を開けてても泥棒に入られない」
淳「へー」
と、体を痒そうにかき始める。
淳「今は鍵をかけてますか？」
秀樹「大丈夫。かけてるよ」
淳、胸をなでおろす。
秀樹「みんな腹減ってるだろ。何か食うか」
陽葵、嬉しそうに頷く。

○古谷家・台所（夕方）
淳、亮介、賢太、陽葵、テーブルに着いて勢い良く食事をしている。
秀樹、横に立ってそれを見ている。

○古谷家の外（夜）
周囲は真っ暗で、虫の鳴き声が響き渡っている。

○古谷家・リビング（夜）
秀樹、座っている。
淳、座って痒そうに体をかいている。
秀樹「さっきからずっと痒そうにしてるけど、虫にでも刺されたのか？」
淳「アレルギーなんです。色んな」
秀樹「そうだったのか。なら薬が必要だな。だけど……」
風呂場の方から賢太の声が聞こえてくる。
賢太の声「あー！」
秀樹、淳、驚いて声のする方向を見る。

○古谷家・風呂場の前（夜）
秀樹、走って来ると扉の前に立つ。
秀樹「どうした！」
賢太の声「体が変だよ！」
秀樹、扉を開け中に入る。
賢太の声「首にシミとかブツブツが……ほら

これ！」
秀樹の声「なんだ、驚かすなよー」
賢太の声「違うんだよ。オバサンに引っかかれた場所の周りが変になってるんだ」
秀樹の声「これは虫刺されか、ばい菌が入っただけだ」
賢太の声「本当に？」
秀樹の声「ああ。本当だ。いろんな事があり過ぎて、不安になってるだけだ。心配するな」
秀樹、風呂から出て来ると扉を、閉める。安心する様に一息吐くと、その場から離れて行く。

○古谷家・リビング（夜）
淳、体を痒そうに激しくかいている。
秀樹、戻って来る。
淳「何があったんですか？」
秀樹「賢太のヤツ、精神的にかなり疲れてるみたいなんだ」

と、座る。

秀樹「ここに来るまでに、少し怪我をしたんだよな？」

淳「それ、多分オバサンに襲われた時のです」

秀樹「そう言ってた。そこにばい菌が入ったか何かで、肌荒れしたみたいなんだ」

淳「肌荒れですか」

秀樹「ほら、触ったら肌が荒れる葉ってあるだろ。それに触れたような感じだよ」

淳、納得するように頷く。

秀樹「で、淳君だったっけ？」

淳「はい」

秀樹「賢太が風呂から上がったら、風呂に入って来たらいい。少しは痒いのが収まるかも知れない」

淳「はい」

秀樹「じゃあ、それまでゆっくりしときな」

と、立ち上がって部屋から出て行く。

○古谷家・寝室（夜）

暗い部屋に布団が４セット並んでいる。その上で、陽葵、亮介、眠っている。

賢太、上向きに寝て目を開けている

淳、廊下を歩いて来ると、扉を開けて入って来る。

淳「あー、スッキリしたー」

と、布団の上で横になる。

賢太「痒いのはどうだ？」

淳「それが、全く痒くなくなったよ」

賢太「そっか。良かったな」

淳「なんか、髪を洗ってて気づいたんだけど、一週間ぐらい風呂に入ってない時と同じだった」

賢太「家を出てからまだ２日目なのに？」

淳「良く解らないけど、もっと時間が経ってる感じがする」

賢太「外にずっといたから汚れてたんじゃないの」

淳「そうだな。古谷の方はどう？」

賢太「もしかしたら、俺は変な病気に感染して死ぬのかも知れない」

淳、少し笑う。

淳「古谷のお兄さんが言ってたよ。古谷は普段小さな事は気にしないけど、何かあると心配性になって、すぐ最悪の事を考えるって」

賢太「俺は嫌だよ。この傷が酷くなって、気づいたらおばさんになってるなんて」

と、淳と笑い出す。

亮介「んー！」

と、眠りながら、笑い声に不快そうな表情を浮かべて寝返りをうつ。

○古谷家・台所（夜）

秀樹、冷蔵庫を開けて、中を見ている。

食材が少なくなっている。

冷蔵庫を閉め、近くの棚を開けて中を見る。

中身が空っぽになっている。

秀樹「まずいなー」

テーブルの上に置かれたスマートフォンから着信音が鳴る。

秀樹、机の元に行き、スマートフォンを手に取り画面を見る。

○古谷家の外（夜）

秀樹、古谷家から走って出て来ると、横に停まっている改造車の元に行き乗込む。

改造車、エンジンがかかると、照明をつけて急ぐように走り去って行く。

○峠道（夜）

暗闇の中、改造車、走っている。

○改造車の車内（夜）

秀樹、運転している。

○古谷家・寝室（夜）

秀樹、亮介、陽葵、眠っている。

賢太、その横で、苦しむような大きなイビキをかいて眠っている。

○公衆電話の前（夜）

改造車、走って来ると停車する。

○改造車の車内（夜）

窓の外に公衆電話が見える。

運転席に座っている秀樹、その周囲を探すように見渡している。

秀樹、窓を開けて顔を出す。

秀樹「おじさーん！」

誰もいない。静まりかえっている。

秀樹「おじさーん！俺だよ。秀樹だよ」

古谷治郎（６８）、物陰から姿を現す。

治郎「秀樹君か？」

秀樹「おじさん⁉」

治郎、急いで改造車の元にやって来

ると、助手席に乗り込む。

治郎「早く行こう。この辺りにもおばさんがいる」

秀樹、正面を向いて運転を始める。

○道路（夜）

改造車、走っている。

○改造車の車内（夜）

運転している秀樹。

秀樹「おじさん怪我はない？」

助手席の治郎、右腕の服をめくると、包帯が巻かれていて血がついている。

秀樹「誰にこんな事を？」

治郎「豹変した妻にやられた」

秀樹「あのやさしいおばさんが……」

秀樹、頷く。

秀樹「とにかく、早く家に帰って手当てしないと」

治郎「これなら大丈夫だ。もう4日目で、

傷も治り始めてる」
秀樹「4日間も？」
治郎「ああ。そんな事より、みんなは？」
秀樹「家に兄弟3人とその友達2人がいるよ」
治郎「陽葵に賢太も無事なのか。良かった」
と、安心したように遠くを見る。

○古谷家・外観（朝）
改造車、横に止まっている。

○古谷家・台所（朝）
秀樹、料理を作っている。
陽葵、足音と共に入って来る。
陽葵「大変だよ！」
秀樹、振り返る。
秀樹「どうしたの？」
陽葵「賢ちゃん調子悪いの」
秀樹「賢太の調子が？」
陽葵、頷く。

秀樹、陽葵と急いで台所から出て行く。

○古谷家・寝室（朝）

賢太、苦しそうに横になっている。

淳、亮介、隣で賢太を見ている。

秀樹、扉を開けて入って来ると、賢太の元に来て額に触る。

陽葵、開いた扉の外から見ている。

秀樹「熱はないなー」

と、手を離す。

賢太「（ガラガラ声）でも、なんか体が変なんだよ」

秀樹、少し笑う。

賢太「（ガラガラ声）なんで笑ってるの？」

秀樹、安心するように一息吐く。

秀樹「陽葵ちゃんが大変って言うから、どんな状態かと思って心配しただろ。その声を聞いて安心した。間違いなく風邪だ」

賢太「（ガラガラ声）喉だけじゃなくて、全体

が何か違うんだ」
秀樹「それが典型的な風邪をひいてる症状だ。熱はこれから出るかもしれない。今から薬を飲んで、暖かくして眠っておけばすぐ治る」
賢太「(ガラガラ声)本当に？」
秀樹「俺も働き過ぎた時に風邪をひくとそうなる。とりあえず、薬を持って来る」
と、部屋から出て行き、扉を閉める。
賢太、安心するよう息を吐いて、目を瞑る。
淳、亮介、嬉しそうに顔を合わせる。

○古谷家・台所(朝)
秀樹、陽葵、治郎、淳、亮介、テーブルに着いて食事を食べている。
治郎「2日前からだって？」
淳「はい。その日、朝起きたら、お母さんが襲ってきて」
治郎「それ以前は」

淳「いつも通りでした。お父さんも普通に家にいたし」
と、亮介を見る。
淳「だよね」
亮介、頷く。
治郎「前日に何か変わった事は？」
淳「何もなかったです」
亮介「僕が好きなシチューを沢山作ってくれたんだよね」
淳、頷く。
治郎「いつも通りと言う事か」
淳「あっ、そういえば」
治郎「何かあったのか？」
淳「そのシチュー、なぜか腐ってて、ウジが沸いてたんです」
治郎「前日の夜に作ったシチューにウジが？」
淳「はい」
治郎、眉を潜めてアゴに手を当てる。

○古谷家・寝室（朝）

賢太、イビキをかいて眠っている。
治郎、扉を開けて、中に入って来る
と、賢太の顔を見る。

○古谷家・台所（朝）
秀樹、陽葵、淳、亮介、アイスクリー
ムを食べている。
秀樹「これを食べ終わったら、皆自分の布
団を別の部屋に運ぶぞ」
陽葵「なんで別の部屋に」
秀樹「風邪は人に移るんだ。今、賢太の風
邪が移ったら大変だろ」
陽葵「そっか。どの部屋に行くの？」
秀樹「お客さん用の部屋だよ」
陽葵「そこ知ってるよ！広い所でしょ」
秀樹「なら、陽葵が皆を案内してくれる？」
陽葵、頷く。
秀樹「じゃあ任せたよ」
陽葵、嬉しそうに笑みを浮かべる。

○古谷家・廊下（朝）

客間の扉が開いている。

陽葵、淳、亮介、布団を持って歩いて来ると、客間の中に入って行く。

○古谷家・台所

秀樹、皿を洗っている。

淳、体をかきながらやって来る。

淳「あのー」

秀樹、振り返る。

秀樹「どうしたんだ？」

淳「また痒くなってきて。お風呂に入ってもいいですか？」

秀樹「ああいいよ。多分、肌が乾燥してるんだな」

淳「そんな感じがします。なんかすごく喉が渇いて」

秀樹「冷蔵の中にお茶が入ってるから、自由に飲んでくれ」

淳「じゃあ、後でいただきます」

秀樹「ああ。じゃあ、タオルは後で持って行くから行ってきな」
淳「はい。お願いします」
と、台所から出て行く。
秀樹、皿を洗いだす。

○古谷家・リビング
治郎、座って本を読んでいる。
淳、風呂から上がって出てくる。
治郎「おー、どうだ？ 痒いのは収まったか」
淳「はい」
治郎「それは良かった」
淳「何を読んでるんですか？」
治郎「うん、これはね、金融の本だよ。昔、そういう仕事をしてたからね」
と、棚を指差す。
治郎「そこに、面白そうな物が色々あるぞ」
淳、棚の方を見て眉を顰める。
その先には、飾られている写真がある。
治郎「その写真は１０年位前の写真だ」

と、立ち上がり、写真を手に取って
淳と見る。
写真には、若い頃の恵子、三栗高等
学校と書かれた赤いジャージを着てい
る賢太の父親、１４歳の秀樹と４
歳の賢太が写っている。
治郎、賢太を指差す。
治郎「これが賢太だ。まだ３、４歳ぐらいの
時だ。かわいい顔をしてるだろう」
と、秀樹、母親と順番に指差す。
治郎「これが秀樹で、これが賢太と秀樹の
お母さん」
淳と、赤いジャージの男を指さす。
淳「この赤いジャージの人は？」
治郎「あー、これは秀樹と賢太の父さん。
私の弟だ」
淳、じっと賢太の父親を見ている。
治郎「うん？どうした？」
淳「昨日、このジャージを着た人を見ました」
次郎、マジメな表情になる。

治郎「このジャージを着た人っていうのは？この写真のおじさんかい？」
淳「いや、オバサンです」
治郎「それなら、似た服だなー」
と、立ち上がり写真を元の場所に戻す。
治郎「このジャージは、賢太のお父さんがまだ高校生の頃に着ていた、学校の体操着なんだ。丈夫だからそれをずーっと着てるんだ。だから、今じゃこのジャージを着ているのは、賢太のお父さんぐらいだ」
淳「その学校の名前って、三栗高等学校ですか」
治郎、呆然と淳を見る。
秀樹「まさか、そう書いていたのか？」
淳、治郎を見て頷く。
治郎、考えるように視線をそらす。

○古谷家・外観（夜）
周囲が薄暗くなっている。

○古谷家・台所（夜）

時計の針が１０時を示している。

秀樹、座って寛ぐようにコーヒーを飲んでいる。

次郎、写真を手に入って来る。

治郎「ちょっといいか？」

秀樹「どうしたの？」

治郎、写真を秀樹の前に置く。

秀樹「あっ、これね」

と、手に取って見る。

治郎「覚えてるか？」

秀樹「俺が４歳の時の写真だよ」

治郎「このジャージは？」

秀樹、笑う。

秀樹「父さんが昔から良く着てる服だよね」

治郎、賢太の前に座る。

治郎「実はな、賢太の友達の淳君が、気になる事を言っていたんだ」

秀樹「気になる事？」

秀樹、頷く。

治郎「昨日、堤防に散弾銃を持ったお前達の母さんがやって来た話しは聞いたな」
秀樹、暗い表情で頷く。
治郎「その時、同じ車の中から出て来た中年の女性が、このジャージを着ていたらしい」
秀樹「父さんのジャージを？」
治郎、頷く。
秀樹「じゃあ、そいつが父さんを……」
治郎「そうじゃないんだ。信じられないかもしれないが、その中年の女性が、お前のお父さんだ」
秀樹「なっ、何言ってんだよおじさん？父さんは男だよ」
治郎「今日、気づいた事がある」
と、服をめくり、右腕の包帯を外す。
毛深く、シミが多い腕だが、傷口の周辺だけ中年女性の肌質になっている。
秀樹、その腕を見て目を大きくする。

秀樹「こっ、これは？」
賢太「４日前に怪我をしてから、体がおかしくなってきた。おそらく、私は中年女性になってしまうだろう」
秀樹「ちょっと待ってよ。確かに傷口の周辺に変化があるのは解るよ。だけど、おじさんがおばさんになるって、飛躍し過ぎじゃないかな？」
治郎「この世から男が消えた理由はどう説明する？」
秀樹「そりゃ、おばさん達が」
治郎「それなら死体がそこら中に転がっているはずだ。そんな死体はどこにもない。それに、大の男がそう簡単にオバサンにやられると思うか？」
秀樹、治郎を見て黙り込む。
治郎「この傷の回復度合いを見てくれ。本来ならまだ治っていない深い切り傷だ。それが、全く別の形で再生され、周囲にまで広がっている」

秀樹「って事は……おじさんも、賢太も？」
治郎、ゆっくりと深く頷く。
秀樹、困ったようにため息を吐き、頭を抱える。

○古谷家の外（夜）
秀樹、古谷家から出てくると、横に止まっている改造車に乗り込む。

○改造車の車内（夜）
運転席に座って黙り込んでいる秀樹、大きなため息を吐く。
秀樹「何がどうなってんだ一体……」
と、キーを回してエンジンをかける。

○古谷家の外（夜）
古谷家の横に停車している改造車、照明がつくと走り去って行く。

○改造車の車内（夜）

秀樹、無表情に運転している。

○道路（夜）

改造車、走り去って行く。

その先に、真っ暗なホームセンターが見える。

○ホームセンターの駐車場（夜）

薄暗く、一台も車は止まっていない。

改造車、入って来ると、駐車する。

秀樹、バールを片手に改造車から降りる。

ホームセンターの方へ向かう。

○ホームセンターの外・出入口（夜）

秀樹、バールを片手に歩いて来る。

ガラス張りの扉がある。扉を動かすが、鍵がかかっていて開かない。

バールを振り上げて、構える。

○ホームセンター・飲食場（夜）

近くからガラスの割れる音が響き渡る。

バールを持っている秀樹、近くの通路を横切るように通り過ぎて行く。

○ホームセンター・食料品コーナー（夜）

秀樹、カゴの乗った台車を3台押して、缶詰コーナーの前にやって来る。

棚に置かれてる缶詰を、カゴの中に入れていく。

○ホームセンター・お菓子売り場（夜）

秀樹、缶詰や乾燥食品を入れたカゴを乗せた台車3台押してやって来る。

棚のお菓子をカゴの中に積み重ねる様に入れていく。

○ホームセンター・駐車場（夜）

秀樹、３台の台車を押して改造車の元に歩いて来る。
改造車のトランクを開け、その中に食品が詰め込まれたカゴを入れる。
中から缶ビールを一本取り出してから、トランクを閉める。
静けさに包まれる。
缶ビールのフタを開け、一気に飲み干し、大きなため息を吐く。
考えるように黙り込む。
モールの方から全力疾走で近づいて来る足音が聞こえてくる。
秀樹、驚くように音のする方を見る。
黒い人影に見える矢部隆史（４３）、全力で秀樹の元に走って来る。
秀樹、缶ビールを地面に落として、急いで改造車の運転席に乗り込み、扉を閉める。

○改造車の車内（夜）

運転席に座っている秀樹、カギを鍵穴に差し込もうとすると、床に落とす。

秀樹「しまったっ！」

と、必死に足下を探す。

黒い人影の矢部、走って来て窓にぶつかり、助手席の扉を開けようとする。

カギがかかっていて開かない。

秀樹、焦る様にカギを見つけ、鍵穴に差し込みエンジンをかける。

オートマチックをＰからＤに入れる。

矢部の声「おい！待ってくれ！」

秀樹、窓の外を見る。

矢部、窓の外から、秀樹をじっと見ている。

○道路（夜）

改造車、ホームセンターを背にして、走り去って行く。

○改造車の車内（夜）

秀樹、運転している。

矢部、大きなカバンを膝の上に乗せ

助手席に座っている。

矢部「あそこは何でも揃うから、まあまあ良かったんだ。広すぎて不気味だけどね。だけど、君が扉を破壊してしまったから、もう住めない。あれじゃオバサンどころか、風や虫、野犬や熊まで入って来てしまうよ。ところで、君はこの辺りに住んでいるのかい？」

秀樹「はい」

矢部「そうか。運が良かったね」

秀樹「どこから来たんですか？」

矢部「大都市の郊外にあるベッドタウンさ」

秀樹「一番危険な場所ですね。おばさんが沢山いる」

矢部「そう。思い出したくもない。妻だけではなく、娘までもがオバサンになってしまったんだからね」

秀樹、呆然と矢部を見る。
矢部「やっと目を覚ましたと思ったら、今度は娘がおばさんになった……」
秀樹、困ったように正面を向く。
矢部「ん？どうしたんだい？そんな暗い顔をして？」
秀樹「実は、逃げてきた弟の容体がおかしいんです。聞くと、街の方から逃げて来た時、オバサンに首をひっかかれて……」
矢部「感染したのか？」
秀樹「感染……」
矢部「症状は？」
秀樹「熱はないんですけど、風邪をひいたように喉をやられてて」
矢部「なら、もうすぐおばさんになるぞ」
秀樹、矢部の方を見る。
矢部「早くどこかへ連れて行かないと、君達が襲われる事になる」
秀樹、正面を向き、険しい表情を浮かべる。

○古谷家・外（夜）

改造車、走って来ると、古谷家の横に停車する。

○古谷家・廊下（夜）

寝室の前。

賢太のイビキが響いている。

秀樹、矢部、歩いて来ると立ち止まる。

矢部「この音……、間違いない。娘がオバサンになる前にかいていたイビキとそっくりだ」

秀樹、扉を開ける。

矢部、寝室に入る。

秀樹、続く。

○古谷家・台所（夜）

秀樹、治郎、矢部、テーブルを囲むように向き合って座っている。

治郎「そうか、やはり私が賢太と一緒に遠くへ行くしかないな」

矢部「一緒に行くというのは、どういう事ですか？」
治郎「まだあなたには見せていなかったか」
矢部「まさか、あなたは科学者で研究所でも持っているんですか？」
治郎、少し笑う。
治郎「いやいや、そんな大それた物はもってない。私はただの年金生活者だ」
矢部「じゃあ、どういう事ですか？」
治郎「実はね、彼だけじゃないんだよ」
と、服をめくって右腕を見せる。
右腕の大部分が中年女性の腕になっている。
矢部、呆然と腕を見る。
治郎「私は4日前の朝に襲われた」
と、矢部を見て頷く。

○古谷家の前（朝）
太陽に照らし出されている。

○古谷家・廊下（朝）

治郎、寝室の扉の前に歩いて来る。

○古谷家・寝室（朝）

治郎、扉を開ける。

背を向けて座っている賢太、元気そうに治郎の方へと振り向く。

治郎「おお」

と、少し驚いた表情をする。

賢太、笑みを浮かべる。

治郎「まさか、あっ、いや、元気になったのか？」

賢太、頷く。

治郎、少し嬉しそうな表情をする。

賢太「（中年女性の声）もう大丈夫だよ！」

治郎、表情を硬直させる。

○古谷家・小さな部屋（朝）

治郎、深刻な表情で座っている。

秀樹、矢部、その正面に座っている。

治郎「間違いなく悪い方へ事は進んでいる」
と、秀樹とうつむいて黙り込む。
矢部「そろそろ対策を取りましょう」
治郎「そうだな……」
と、諦めるように頷く。
秀樹「でも、もしおじさんが先におばさんになったら、賢太が襲われてしまう。逆も同じで、賢太が先におばさんになったら」
治郎「いや、私はまだ大丈夫だ。解るんだ」
秀樹「解る？」
治郎「ハッキリと解る。例えばこの目だ」
と、自分の目を指さす。
治郎「初老を過ぎた後、視力が落ちだして、老眼鏡を使いだした。だが、今の私にその眼鏡は度が強過ぎる。それに、私は中年から老人になった時の事もしっかりと覚えているんだ」
矢部「それは更年期では？」
治郎「そう」
矢部「という事は、若返っている？」

治郎、頷く。

治郎「あの時の感覚を覚えている。だから、自分が中年女性になる時期が解るんだ。だから心配はいらない。私が賢太を襲う事はない。安全に連れて行く事ができる」

秀樹「だけど賢太がおじさんを襲う事は？」

治郎「それは別に構わない事だ」

矢部「確かに、襲われておばさんになるか、自然とオバサンになるかの違いに過ぎない」

治郎「そう。それに、私は十分長く生きてきたつもりだ」

と、秀樹を見てニヤリとする。

○古谷家・リビング

亮介、陽葵、子供向けの古いテレビゲームをしている。

淳、賢太、それを見ている。

治郎、扉を開けて中を覗く。

治郎「賢ちゃん、ちょっといいか」

賢太、立ち上がって、治郎と別の部

屋に行く。

○古谷家・狭い部屋

机にお菓子が置かれている。

治郎、賢太、入って来ると向き合って座る。

治郎「食べていいぞ」

賢太、お菓子を取って食べる。

治郎「賢ちゃん、ここでの生活はどうだ？」

賢太「(中年女性)楽しいよ。お兄ちゃんはいるし、陽葵ちゃんもいるし、淳や亮介君もいるから、あっ、あとおじさんもね」

治郎「そうかー。気に入ってるんだな」

賢太、頷く。

賢太「それで、何の話があるの？」

と、嬉しそうな表情を浮かべる。

無表情の治郎、笑みを浮かべる。

○古谷家・離れの部屋

秀樹、座っている。

治郎、扉を開けて入って来て座る。
秀樹「どうたったの？」
治郎「賢太はここをとても気に入っている様だ。大好きな皆がいるからと」
秀樹、ため息を吐く。
秀樹「やっぱり、この事は隠しておこうよ。俺達が常に賢太とおじさんの近くにいて、おばさんになった瞬間に取り押さえる」
治郎「私と秀樹の２人を２４時間監視し続けるのは難しい。いつオバサンになるかも全く解らないんだ」
と、顔を横に振る。
秀樹「だけど」
治郎「危険過ぎる。それに、ここには賢太以外に３人の子供がいるんだぞ」
秀樹、黙り込む。
治郎、息を吸い込む。
治郎「偉そうな事を言ったが……」
と、吐き出す。
治郎「お前と一緒で、どうしたらいいのかさっ

ぱりだ」
と、顔を横に振る。
○古谷家・台所
賢太、暗い表情でテーブルに着いている。
治郎、秀樹、扉を開けて入って来る。
秀樹「賢太、どうしたんだそんな顔して？」
賢太「（中年女性の声）お兄ちゃん、僕やっぱりダメなんだね」
秀樹「ダメって……、何を言ってるんだ？」
賢太「（中年女性の声）僕、オバサンになっちゃうんでしょ」
秀樹、治郎、驚いた表情を浮かべる。
秀樹「なっ、何でそんな事を？」
賢太「（中年女性の声）矢部さんに聞いたよ」
と、悔しそうにうつむく。
賢太「（中年女性の声）お兄ちゃん、涙を拭いて」
秀樹「いや、まだ泣いてないよ」

賢太「(中年女性の声)僕も自分が何かおかしいと思ってたんだ。トイレに行ったら、体がおかしくなってて」
秀樹「まさかお前……そこまで……」
賢太、頷く。
秀樹「なんで言わなかったんだ？」
賢太「(中年女性の声)みんなが怖がるし心配するから」
矢部、隣の部屋から入って来る。
矢部「賢太君はそれを見て、自分が死んでしまうと思っていたらしい。皆を心配させないようにする為に黙っていた。つまり、その時にはもう覚悟を決めていたんだ」
治郎、上を見上げてため息を吐く。
治郎「賢ちゃんは、私達が思っていたよりも更に成長していたんだなー」
と、歯をかみしめる。
秀樹「賢太、お前はこれからどうしたい？」
賢太、悲しそうな表情で秀樹を見る。
賢太「(中年女性の声)みんなを襲いたくな

い。それが一番嫌だよ」

と、悲しい事をこらえるように、口角を上げて、秀樹をじっと見る。

○古谷家・離れの部屋

治郎、布団をたたんで、押し入れの中に入れる。

部屋の片付けをする。

○古谷家・台所

賢太、料理を食べている。

秀樹、正面に座って賢太を見ている。

賢太「(中年女性の声)お兄ちゃん」

秀樹「ん？」

賢太「(中年女性の声)僕、怖くないよ。別に死ぬわけじゃないんだから。お母さんと同じで、ただオバサンになってしまうだけなんだから。オバサンになるのは嫌だけどね……」

と、下を向く。

秀樹「……。そうだな」
賢太、顔を上げて秀樹を見る。
賢太「（中年女性の声）でも、オバサンになったら、またお母さんとも仲良くなれるよね？」
秀樹「ああ、なれるよ。家にも帰れる……」
賢太、食事をすべて食べ終える。
賢太「（中年女性の声）ごちそうさま。ありがとう」
秀樹「他に何かないか？最後なんだから、なんでも言ってくれよ」
賢太「（中年女性の声）なんでも言っていいの？」
秀樹「当たり前だろ」
賢太「（中年女性の声）じゃあ……欲しいものがあるんだけど……」
秀樹「ああ、なんだ？」
賢太、秀樹をじっと見ている。

○古谷家の外（夜）

改造された大型スクーターを背に、治郎、賢太、立っている。
向き合うように秀樹、矢部、淳、亮介、陽葵、立っている。
淳「本当に行っちゃうんだ……」
賢太、笑みを浮かべて頷く。
淳「とっ、突然過ぎるよな……なんか」
賢太、うつむく。
矢部以外の全員、悲しそうに黙り込む。
淳、体を痒そうにかき始める。
秀樹「賢太」
と、ポケットから黒字に無数の星が描かれているケースに入ったスマートフォンを取り出す。
秀樹「これ」
と、賢太に渡す。
賢太、受け取る。
賢太「(中年女性の声)これは？」
秀樹「２つ持ってるんだ。おばさん同士は仲

がいいらしいから、これでお母さんに連絡すればいい」

賢太「(中年女性の声)ありがとう」

秀樹「お母さんと仲良くな」

賢太、頷く。

治郎、賢太の肩に手を乗せる。

治郎「さあ、そろそろ行くか」

賢太、治郎を見上げてうなずく。

治郎「お前のバイクを運転させて貰うぞ」

と、大型スクーターにまたがり、エンジンをかける。

賢太、大型スクーターの後に座る。

治郎、秀樹を見る。

治郎「後の事は任せたぞ」

秀樹、頷く。

治郎「よし」

と、正面を向く。

賢太、全員を1人1人見ていく。

淳、体を痒そうに激しくかきまくっている。

賢太「(中年女性の声)みんな、じゃあね」
治郎、賢太を後ろに乗せて、走り去って行く。

○古谷家・リビング(夜)
落ち込んだように座っている淳、亮介、陽葵。
淳、体を痒そうにかきだす。

○古谷家・台所(夜)
秀樹、地べたに座って壁にもたれている。
矢部、入って来る。
秀樹「まさか、こんな事になるなんて思ってもいなかったですよ。数日前まではいつも通りだったのに」
矢部「そうだろうね。僕も娘がオバサンになった時は驚いた」
秀樹、頷く。
矢部「せっかく3日ぶりに目が覚めたのに、

次はオバサンになってしまうなんて」
秀樹「3日間も眠っていたんですか？」
矢部、頷く。
矢部「安全な場所に娘と非難して、いろいろ聞きたかった。何が起こったのか。寝る前はどういう状態だったか。そればかりが頭の中に浮かんできて疲れきったよ。ノイローゼさ。でも、ゆっくりと1人で休んだら少しは良くなった。だから、君も少しの間休んだ方が良い」
秀樹「そうですね。だけど、子供達がいますから、今の僕は親の代わりなんで」
矢部「それなら、僕に任せておけばいい。ここにいて何もしないのも悪いしね」
秀樹「ですけど……」
矢部「妻は育児放棄。僕は無職。そんな家庭だったから、料理の腕は一流だよ」
秀樹、少し笑う。
秀樹「なんか、すいません」
矢部「いいんだ」

秀樹「一応、台所とリビングに必要な物は全て揃えているので、自由に使ってください」
矢部「ああ、解った」
秀樹「じゃあ、お言葉に甘えて、少し休ませてもらいます」
と、台所から出て行く。

○古谷家・廊下（夜）
暗くなっている。
客間から、淳が皮膚を激しくかいている音が聞こえてくる。
トイレを流して出てきた矢部、客間の前を通り過ぎるように歩いて来ると、扉の前で止まる。
聞き耳を立ててから、扉を開け中を覗く。
矢部「まだ痒いのかい？」
淳の声「体が痒くて痒くて……どんどんひどくなって眠れないんです」

矢部「それは実に興味深い！」
と、部屋の中に入る。

○風呂場の前（夜）
風呂の電気がついている。
水を入れる音が響いている。

○古谷家・外観（朝）
太陽の光に照らし出されている。

○古谷家・秀樹の部屋の前（朝）
外の光が廊下に入って明るい。
髭が伸びている秀樹、扉を開けて出て来る。

○古谷家・台所（朝）
テーブルの上に火を通していない生のハンバーグが置かれている。
矢部、考え込むように両腕を組んで座っている。

秀樹、入って来る。
秀樹「おはようございます」
矢部、秀樹の方を見る。
矢部「あー、おはよう。ついに出てきたか」
秀樹「もう寝過ぎて、これ以上眠れないですよ。それに、お腹も空いたんで」
矢部「なら昨日の残り物があるから、用意するよ」
と、冷蔵庫の中から残り物を取り出し準備をする。
秀樹、テーブルに着き、生のハンバーグを見る。
秀樹「それは何ですか？」
矢部、秀樹の方を向き、生のハンバーグを見る。
矢部「あー、それは僕達のじゃないよ」
秀樹「僕達のじゃない？」
と、眉を顰める。

○風呂場の前（朝）

静まりかえっている。
突然、浴槽の水の中から、人が出てくる音がする。

○古谷家・台所（朝）
座っている秀樹、立っている矢部を呆然と見ている。
矢部「実は、亮介君におかしな事が起こってるんだ」
秀樹「まさか彼も感染して」
矢部「いや、彼はオバサンとは別の何かに変わろうとしているかも知れない」
と、目を大きく開けてニヤリとする。

○古谷家・風呂場の前（朝）
矢部、秀樹、扉の前に立っている。
矢部「（小声）彼は２日前からずっとこの中なんだ」
秀樹「（小声）２日前からずっと……」
矢部、頷く。

秀樹、扉に近づき、ノックをする。
秀樹「淳君？ちょっといいかな？淳君？」
返事がない。
矢部「（小声）多分、水の中にいるんだ」
と、扉に近づくと、強く扉を叩く。
矢部「（大声）淳くーん！ちょっといいかーい！」
水中から何かが出てくる音がする。
（淳の声は、ここからずっと高く、エコーがかかったように響き渡る）
淳「はい」
秀樹、驚いて目と口を大きく開け、矢部を見る。
矢部、腕で秀樹に扉の方を示して頷く。
秀樹、ゆっくりと扉に近づき、開けて、中に入る。

○古谷家・秀樹の部屋（朝）
困った様に黙り込んでいる秀樹、矢

部、向き合って座ってる。
矢部「僕も昨日、淳君を見た時は同じ事を思った」
秀樹「あれはどこから見ても水の中に適応した体でした」
矢部「そう、だから淳君は水の中で呼吸まできるんだ」
秀樹、困り果てたように顔を横に振る。
秀樹「何が起こってるんだ。僕の頭では到底理解できない」
矢部「全てを結び付けて考えるんだ。狂暴なオバサン、オバサンになる人々、水中に適応した淳君」
秀樹「余計に意味が解らなくなりますよ」
と、額に手を当て黙る。
矢部「淳君は普段、薬を飲んでいた事を知ってるね？」
秀樹「確か、アレルギーの薬ですね」
矢部「それだよ」

秀樹「それ？……」
矢部「おそらく、その薬は人間の成長を妨害する為に作られたものだ。つまり、淳君の姿は、人間本来の成長した姿なのかもしれない」
秀樹「何を言ってるんですか？あれが人間本来の姿なんて。それに、僕達は薬を飲んでないですよ」
矢部「大部分の人は別の薬や方法で、封じ込められたからだと思えないかい？」
秀樹「封じ込められた？」
矢部「君も思い当たる事があるはずだ。風邪でもない、体調もいい。なのに得体の知れない注射を打たれた事は？」
秀樹「ええ。ありますけど、だけどそれは」
矢部「他にも病院で必要ないと思える程、大量の薬を飲まされた事、食べている物だって何が入っているか解らない。つまり、それを使って我々を封じ込めている何者かがいる。そう思えないかい？」

秀樹「確かに……。でも、一体、誰が？」
と、矢部をじっと見る。
矢部、嬉しそうな表情になっていく。

○古谷家・秀樹の部屋
机の上で、スマートフォンが振動している。
画面には、着信・古谷賢太と表示されている。

○古谷家・台所
矢部、生のハンバーグが２つ乗っている皿を持っている。
秀樹、矢部の正面に立って、そのハンバーグを見ている。
秀樹「淳君は、本当にこのまま食べるんですか？」
矢部「そう、彼は進化したんだ」
と、ニヤりとする。
外から、大型スクーターの音が聞こえ

てくる。
秀樹、眉を顰めてその音を黙って聞く。
秀樹「僕のバイクの音だ……」
矢部「なんだって？」
と、音のする方向を向く。

○古谷家・屋根裏部屋
段ボールや物が沢山置かれている。
大型スクーターの音が、どんどん大きくなって近づいて来る。
秀樹、矢部、階段を登ってやって来ると、人一人が通れる程の小さな窓の前に向かう。そこから外を覗く。
窓からは、古谷家の玄関の周辺だけが見える。そこに、賢太の服を着た賢太中年女性（５２）が運転する大型スクーターがやって来る。
後ろには、治郎の服を着ている治郎中年女性（４８）が乗っている。

矢部「(小声)あれは君の……」
秀樹、口を開けて呆然とする。

○古谷家の前
治郎中年女性、一軒家の目の前に立っている。
賢太中年女性、エンジンを切って大型スクーターの運転席から降りると、
治郎中年女性の隣にやって来る。
治郎中年女性「本当にこの家の中にいるの？」
賢太中年女性「間違いないわ。この中にクソガキ3匹とクソオヤジ2頭がいた記憶があるの」
治郎中年女性「なら、今すぐ火をつけてあぶり出してやりましょ！」
賢太中年女性「だけどこっちは私達2人だけ。だから、逃げられるかもしれないわ」
治郎中年女性「あっ」
と、口を開けて、手で隠す。

賢太中年女性「だからみんなを集めましょ」
治郎中年女性「そうね。それがいいわ。うん」
賢太中年女性「じゃ、今から電話するわね」
と、黒字に無数の星が描かれているケースに入ったスマートフォンをポケットから取り出す。
画面を操作して耳に当てる。
賢太中年女性「あっ、どうもこんにちわー古谷ですー。恵子さんですか？お久しぶりですー。いえいえー、こちらこそー」
と、笑顔で頭を下げる。
賢太中年女性「いえいえいえいえ、いえいえ」
と、嬉しそうに手を振る。
治郎中年女性、賢太中年女性を見て、自分も嬉しそうにして、頷く。
賢太中年女性「そんなーとんでもないですよー。ええ。その話なんですけどね」
と、無表情になり、前かがみになって、口元を隠すように手を当てる。
賢太中年女性「（小声）実は今、クソガキ３

匹とクソオヤジ2頭がいる家の前にいるんです。そうなですよ」

治郎中年女性、腕を組んで、怒った表情で4度頷く。

○古谷家・屋根裏部屋

窓から外を見てる秀樹、矢部、窓から離れる。

矢部「(小声)これはまずい事になったよ。仲間を集めるつもりだ」

秀樹「(小声)多分、今話してる相手は僕の母さんです」

矢部「(小声)君の？」

秀樹「(小声)はい。母は散弾銃を持ち歩いてます」

矢部「(小声)なんだって？」

と、驚いた様に目を大きく開ける。

○古谷家の前

賢太中年女性、スマートフォンに耳を

当てている。
治郎中年女性、隣で賢太中年女性を見ている。
背後に大型スクーター、止まっている。
賢太中年女性「えー！？」
と、ニヤリとする。
賢太中年女性「それは頼もしいわー。じゃあ、恵子さんにクソを蜂の巣にしてもらって、うんうん。ええ。ええ。解りましたー。じゃあ待ってますんでー。はーい。お気をつけて。失礼しまーす。はーい」
と、嬉しそうにスマートフォンから耳を離す。
治郎中年女性「恵子さんはなんて？」
賢太中年女性「散弾銃を持って来て、クソガキをハチの巣にしてくれるんだって」
治郎中年女性「いいわねー」
賢太中年女性「それもお友達を３０人位連れて来るって」
治郎中年女性、胸に手を当てる。

治郎中年女性「それは頼もしいわー。この調子なら一匹一頭の残らずハチの巣のコテンパンね」
賢太中年女性「もちろんよ」
と、治郎中年女性と笑い合う。

○古谷家・屋根裏部屋
秀樹、矢部、立っている。
矢部「(小声)早くここから避難しよう」
秀樹「(小声)はい。でも、どこに？」
矢部「海の近くだよ。淳君には水が必要なんだ。これは生命に関わる事だよ。それに、その近くなら船がある。それを使っておばさんのいない島に行こう」
秀樹「だけど、それだと食料は？」
矢部「大丈夫。ちゃんと考えてある」
秀樹「解りました。じゃあ、みんなを集めてきます」
と、急いで階段を下りて行く。

○古谷家・客間

亮介、陽葵、ゲームをしている。

秀樹、足音と共にやって来ると、扉を開ける。

秀樹「二人とも来るんだ」

亮介、陽葵、立ち上がって秀樹と共に客間から出る。

○古谷家・風呂場の前

秀樹、走って来る。

秀樹「淳君！聞こえるか？」

反応がない。

秀樹「淳君！」

と、扉を叩く。

風呂場の中から、何かが出て来る音が聞こえる。

○古谷家・屋根裏部屋

矢部、窓の外を見ている。

秀樹、少しすると、階段を駆け上が

って来る。

秀樹「みんな準備できました」

矢部、振り返る。

矢部「あの２人もどこかへ行ったよ。今がチャンスだ」

と、秀樹と階段を下りて行く。

○古谷家・リビング

秀樹、矢部、リビングに入って来る。

淳、緑色のカッパそっくりな姿をした、カッパ淳（１５）になって立っている。

その隣に、亮介、陽葵、立っている。

矢部「みんないるね。よし、行こう！」

全員、玄関に向かう。

○古谷家・玄関・内側

全員、やって来て靴を履くと、外へ出て行く。

○古谷家の外

秀樹を先頭に、全員、足早に出てくる。
そのまま家の隣に行くと、改造車、破壊されている。
秀樹「くっ、車が……」
矢部「なんて事だ」
秀樹「この先は長い一本道です。車がないと、どこにも移動できない」
改造バイクの音が猛スピードで近づいて来る。
秀樹「また来た！」
矢部「とりあえず家の中に避難だ！」
全員、走って古谷家に引き返す。

○古谷家・リビング
秀樹、カッパ淳、亮介、陽葵、円を囲むように集まって黙っている。
矢部、廊下から入って来る。
秀樹「どうでした？」
矢部「ずっと家の前に立っているよ」

秀樹「俺達が逃げないように見張ってるんだ」
矢部「そうだろうね。それも、二人とも刀の様に長い刺身包丁を持ってる」
秀樹、呆れる様にため息を吐き、顔を横に振る
矢部「それを取りに行っていたんだろう。その間に、逃げられない様に車を破壊した」
秀樹「ぞっとしますね。先を読まれてるなんて」
矢部「あのおばさん達は予想より遙かに賢い。手強い相手だ」
亮介、陽葵、不安そうな表情を浮かべる。
秀樹「矢部さん、なんだかんだ言っても、相手は所詮おばさんです。こうなったら、僕たち2人であの2人を倒しましょう」
矢部「バイクを取り戻す。それをうまく使ってという考えなら、もう無理だよ」
秀樹「なぜですか？」

矢部「今、そのバイクを破壊していた」
秀樹「それも読まれていた？」
矢部、頷く。
矢部「何が何でも、僕達を消したいようだ」
秀樹、困ったように黙り込む。
カッパ淳「あの」
と、手を上げる。
矢部、秀樹、カッパ淳を見る。
カッパ淳「おばさん達が車で来たら、それを奪うのはどうですか？」
矢部「奪うって、相手は３０人だよ」
秀樹「その中には散弾銃を持った俺の母さんまでいる」
矢部「とても戦って勝てる数じゃない」
カッパ淳「引き込めば、何とかなるかも」
矢部「ん？引き込むというのはどういう意味だい？」
カッパ淳「この家は広いですよね」
秀樹「まさか、家の中にオバサン達を入れる？」

カッパ「そうすれば、外には誰もいなくなります。その隙に車を奪うんです」
秀樹、矢部、顔を合せる。
矢部「実にいいアイデアだ」
秀樹「確かに」
矢部「となると、問題はどこに誘導して、どこから出るかという事になる」
秀樹「屋根裏部屋があります」
矢部「あの窓かい？」
秀樹「あそこからならハシゴを使えば十分地上に降りられます。それまでの間、階段に何か物を置いて蓋をしておけば、一階にオバサン達を詰め込めるはずです」
矢部「だが、一つ問題がある。おばさん達はバイクの時のように、車を破壊するかも知れない」
秀樹、困った様に黙る。
カッパ淳「あの」
と、手を上げる。
全員、カッパ淳を見る。

カッパ淳「その前に怒らせたらいいと思います」
矢部「怒らせる？」
カッパ淳「前もそうだったんですけど、おばさん達は怒ると周りが見えなくなって、感情のままに突き進むんです」
矢部、カッパ淳を指さす。
矢部「知能を低下させて引き込むのか！」
カッパ淳「はい」
矢部、手と手を叩いて姿勢を変える。
矢部「いい考えだ。実にいい！」
と、秀樹を見て頷く。

○古谷家・庭
矢部、家の中から脚立を持って出て来る。
脚立を立てると、家の中に戻って行く。

○古谷家・台所
秀樹、棚からオリーブ油、ゴマ油、洗

剤を手に取る。
冷蔵庫を開けて、中からバターを取って出て行く。

○古谷家・廊下
秀樹、やって来ると、床にゴマ油、オリーブ油、洗剤、バターをまき散らす。

○古谷家の外
賢太中年女性、治郎中年女性、長い刺身包丁を手に、世間話をしながら、古谷家を見張る様に立っている。
車の音が聞こえてくる。
賢太中年女性、治郎中年女性、音のする方向を見る。

○古谷家近くの通路
3台のミニバン、走って近づいて来る。

○古谷家の前

賢太中年女性、治郎中年女性、
道の方を向いて立っている。

治郎中年女性「来たわ。ついに来たわよー」

賢太中年女性「やっとね」

白、黒、銀色の3台のミニバン、やって
来ると家の手前に停車する。

刃物を持った中年女性達、ミニバン
から続々降りて来る。

賢太中年女性、治郎中年女性、
下りて来た中年女性達と、笑顔で
会釈をし合う。

賢太中年女性「おはようございまーす」

中年女性A「どうもー」

と、ニコニコし合う。

中年女性B「熱いですねー」

賢太中年女性「本当もう夏見たい」

中年女性B「ねー本当に」

恵子、先頭の白いミニバンの助手席か
ら、散弾銃を手に持って降りて来る。

賢太中年女性「あ、古谷さーん！」
と、手を振る。
恵子、賢太中年女性を見ると、笑みを浮かべる。
恵子「あらー賢太さん。どうもー久しぶりー」
と、お辞儀をする。

○古谷家・屋根裏部屋
窓から外を覗いている矢部。
矢部「（小声）ついにオバサン連中がやって来たぞ」
背後に座っている秀樹、カッパ淳、亮介、陽葵、立ち上がる。

○古谷家の前
恵子、賢太中年女性、治郎中年女性、中年女性達、停車している3台のミニバンの周囲に集まっている。
ミニバンから、更に降りて来る中年女

性達。
中年女性D、ミニバンの後ろの扉を開ける。
中にはガソリンの入ったタンクが5個程積まれている。
治郎中年女性「ついにお出ましね」
中年女性D、ガソリンの入ったタンクを取り出し、地面に置いていく。

○古谷家・屋根裏部屋
矢部、秀樹、カッパ淳、亮介、陽葵、向き合って立っている。
矢部「(小声)これからが本番だよ。みんな準備はいいかい？」
全員、覚悟を決めたように頷く。
矢部、秀樹を見る。
矢部「おばさん達を引き寄せる役割、まかせたよ」
秀樹「はい」
と、走ってその場を後にする。

○古谷家・庭

秀樹、廊下から出て来ると、脚立の前にやって来る。

片足を脚立に乗せ、両手で脚立の左右の枠を握り、下を向く。

集中するように、息を吸って目を瞑る。

○古谷家の前

賢太中年女性、治郎中年女性、恵子、中年女性達と向き合っている。

賢太中年女性「もう皆さん恵子さんからお聞きになっている思いますが、もう一度確認の為に説明させてもらいます。まず」

と、治郎中遠女性を腕で示す。

賢太中年女性「治郎さんがこの家に火をつけます。それでこの中にいるクソガキ3匹とクソオヤジ2頭をこの場所にあぶり出します。出て来たら、皆さんお手持ちの道具で、クソガキとクソオヤジを徹底的に容

赦なくコテンパンにしちゃってください」
中年女性達、小刻みに頷く。
恵子、怒った様に、散弾銃の弾を勢い良く装填する。
賢太中年女性、古谷家の方を向き、塀の先に見える、古谷家を見上げる。
中年女性達、同じように庭の塀の先に見える、古谷家を見上げる。
中年女性A「この中にクソガキが」
中年女性B「絶対に一匹足りとも、一頭たりとも逃がさないわよー」
古谷家を睨みつけている恵子、ゆっくりと歯が出るまで歯を噛みしめ、怒った表情で顔を振動させる。
賢太中年女性「では皆さん！」
と、手を上げる。

○古谷家・庭
秀樹、脚立に片足を乗せて、両手で枠を掴み、下を向いて目を瞑っている。

賢太中年女性の声「始めましょう！」
秀樹の目が開く。
○古谷家の外
５人の中年女性グループ、タンクを持って、古谷家の周辺、壁、玄関にガソリンをかけ始める。
恵子、賢太中年女性、中年女性達、古谷家の玄関の周囲を囲んでいる。
治郎中年女性「さあ、あぶりだすわよ」
と、ライターを取り出す。
秀樹、脚立を登って、庭の塀から上半身だけ姿を現す。
玄関の方を見ている中年女性Ａ、秀樹を見て驚くと、指を指す。
中年女性Ａ「あそこを見て！クソオヤジよ！」
治郎中年女性、賢太中年女性、中年女性達、秀樹の方を見ると、怒っ

た表情になる。

中年女性D「クソオヤジー！」

中年女性E「このクソオヤジがー！」

周囲にいる中年女性達、秀樹の元に向かう。

○古谷家・庭

緊張した秀樹、脚立の一番上に座って、塀の外を見ている。

塀の外から、賢太中年女性、治郎中年女性、中年女性達、怒った表情で罵声を浴びせている。

治郎中年女性「クソオヤジー！」

賢太中年女性「治郎さん、早く火をつけてあぶり出して！」

治郎中年女性「任せて！」

秀樹「待て！」

治郎中年女性、玄関の方に歩いて行く。

秀樹「おいやめろ！」

治郎中年女性、玄関に近づき、塀の内側から見えなくなる。
中年女性達、秀樹に罵声を浴びせている。
恵子、離れた場所から、一人だけ無表情に秀樹を見ている。
秀樹、恵子を見ると、目が合う。
秀樹「かっ、母さん……」
無表情の恵子、険しい表情になる。
恵子「クソオヤジー！」
秀樹、驚く。
恵子、アゴを上げる
恵子「このクソオヤジがー！」
秀樹、腹が立ったように舌打ちをする。
秀樹「うるさいクソババア！」
中年女性達、驚いて静まり返る。
恵子、賢太中年女性、中年女性達、徐々に怒った表情になっていき、歯を噛みしめ、顔が小刻みに振動し

だす。
恵子「クソ……」
と、怒りで痙攣しだす。
恵子「やかましいクソガキャァァァァ！」
と、顔が激しく揺れ動く。
中年女性達、賢太中年女性、一斉に叫ぶような罵声をあげ始める。
轟音のような罵声が響き渡る。
治郎中年女性、玄関の方から走って来て姿を現すと、秀樹を睨む。
治郎中年女性「このクソガキがー！」
1人1人が何を言っているのか解らない程、叫ぶような罵声を発する。
秀樹「このクソババア！おいこのクソババー！クソババー」
恵子「このクソガキがー！」
と、散弾銃を秀樹に向ける。
秀樹、驚いて脚立から落ちる。
恵子、その瞬間、散弾銃を発砲する。

古谷家の一部分が破壊され、残骸が吹き飛ぶ。
賢太中年女性、治郎中年女性、中年女性達、一斉に玄関の方に走る。

○古谷家・屋根裏部屋
扉や庭の壁をハンマーや棒で叩く音と、中年女性達の轟音のような罵声が響き渡っている。
矢部、窓から外を見ている。
亮介、陽葵、耐える様に歯を食いしばり、手で両耳を押さえる。
カッパ淳、構えるように立っている。

○古谷家・玄関・内側
秀樹　脚立を抱えて玄関の扉の前に走って来る。
中年女性達、ハンマーやこん棒、包丁などを使って、扉を破壊している。

玄関の扉が壊れていき、穴が開く。
賢太中年女性、その穴から顔を覗かせ、秀樹を睨む。
賢太中年女性「このクソオヤジー！」
秀樹「クソババー！このクソババがー！」
賢太中年女性「クソガキ！このクソガキー！」
と、痙攣するように動いて叫ぶ。
中年女性達、更に激しく扉を破壊する。
扉が割れて押し倒される。
秀樹、急いでその場から逃げる。
賢太中年女性、中年女性、玄関から入り込もうとするが、押し合って詰まってしまう。

○古谷家・廊下
秀樹、脚立を片手に走って来ると、床にまき散らした油で足を滑らせこける。

足が滑って立ち上がるのに苦労し、立ち上がってもまたこける。

○古谷家・玄関・内側

賢太中年女性、中年女性達、怒り狂い、押し合いながらも、破壊された扉から入って来る。

○古谷家・廊下

秀樹、起き上がって脚立を持ってこけない様に進む。

賢太中年女性、中年女性達、勢い良く走って来ると、次から次へとこける。

○古谷家・階段

秀樹、脚立を抱えて廊下を走って来て、階段を上る。

一番上まで来ると、足を滑らせて一番下まで落ちる。

脚立も階段から落ち、秀樹にぶつかる。
中年女性達の足音が近づいて来る。
秀樹、すぐに立ち上がり、脚立を持ち上げて駆け上がって行く。
中年女性達、秀樹を追いかけ駆け上がって来る。

○古谷家・屋根裏部屋

矢部、カッパ淳、階段の横に立ち、棚を倒して道を塞ぐ為に構えている。
亮介、陽葵、その後ろに立っている。
秀樹、脚立を抱えて階段を上って入って来る。
矢部、カッパ淳、棚を押し倒す。
階段と部屋の間を棚が塞ぐ。
賢太中年女性、中年女性達、駆け上がって来ると、棚を下から押し上げる。
中年女性達の叫ぶような罵声が聞

こえてくる。
秀樹「外はどうなってますか？」
矢部、急いで窓の外を見る。
矢部「もう少しだ。もう少しで全員家の中に入って来る」
窓から、古谷家の外が見える。
恵子、散弾銃を片手に、玄関からゆっくりと出て来ると、そこから古谷家を見張るように立つ。
矢部「ダメだ。散弾銃を持ったおばさんが見張ってる！」
階段を塞ぐ背後の棚が、下から突き上げられるように押される。
賢太中年女性、進路を塞ぐタンスを少し持ち上げ、その隙間から怒った顔を覗かせる。
賢太中年女性「クソガキー！クソオヤジー！」
持ち上げられたタンスが落ち、賢太中年女性の顔が挟まれる。

賢太中年女性「あーっ！」
秀樹、窓に近づき外を見る。
窓から、家を見張って立っている恵子の姿。

○古谷家の外
恵子、散弾銃を片手に一軒家を見ている。
秀樹、一軒家の2階の窓から、身を乗り出す。
秀樹「このクソババー」
恵子、探すように声のする方向を見る。
古谷家二階の窓を見上げ、怒った表情になる。
恵子「クソオヤジー！このクソオヤジがー！」
秀樹「クソババー！このクソババがー！」
恵子、怒りを抑えられない様に、散弾銃を秀樹の方に向ける。
秀樹、急いで窓の下に隠れる。

恵子、発砲する。
窓ガラスが割れ、周辺が砕ける。
秀樹、顔を出す。
秀樹「クソババー！このクソババがー！」
恵子、銃を向ける。
秀樹、隠れる。
恵子、発砲する。
窓の周囲が破壊される。
秀樹、顔を出す。
秀樹「クソババー！このクソババアーが！」
と、隠れる。
恵子、引き金を引くが、弾がない。
秀樹、矢部、窓から外を覗く。
恵子、急いで古谷家の玄関に向かって走る。

○古谷家・屋根裏部屋
中年女性達の罵声が響き渡っている。
亮介、陽葵、怯えている。
カッパ淳、構えている。

出入り口を塞ぎ、賢太中年女性の
顔が挟まれているタンスが揺れ動いて
いる。
窓の外を見ている秀樹、矢部。
矢部「クソババアが家の中に入って来た！今
がチャンスだ！」
と、窓から外に出る。
秀樹、亮介と陽葵、カッパ淳の方へと
振り返る。
秀樹「さあ行こう！」
亮介、陽葵、カッパ淳、窓の外に出る。
秀樹、それを手伝う。
秀樹、置かれている脚立を担ぐと、
それを窓から外の矢部に渡す。
窓の外に出る寸前、振り返る。
賢太中年女性と目が合う。
秀樹「クソババー！このクソババが！」
と、背を向け、扉から出て行く。

○古谷家の外

二階の屋根から、地上に向けて脚立が伸びている。
矢部、陽葵、亮介、カッパ淳、秀樹の順に降りると、並んでいる3台のミニバンの先頭車の元へ走る。
賢太中年女性、二階の窓の元に走って来て顔を出す。
賢太中年女性「クソガキー！このクソガキ！」
矢部、運転席に乗り込み扉を閉める。
秀樹、後部座席の扉を開ける。そこから、陽葵、亮介、カッパ淳、後部座席に乗り込む。
秀樹、扉を閉める。
ミニバンのエンジンがかかる。
恵子、古谷家の玄関からミニバンの方に走って来る。

○ミニバンの車内

運転席の矢部、後部座席の陽葵、
亮介、カッパ淳。
秀樹、急いで助手席の扉を開けて乗
り込む。
恵子、運転席の窓の外にやって来る
と、散弾銃を秀樹に向ける。
矢部「あぶない！」
秀樹、矢部、身構える。
恵子、散弾銃の引き金を引くが、
弾切れで玉が出ない。
怒った様に散弾銃で窓を叩く。
矢部、ギアを入れアクセルを踏み込む。
窓の外の恵子と風景が離れる。

○古谷家の外
ミニバン、急加して離れて行く。
恵子、全力で追いかけ、靴が脱げる。
ミニバンの姿が見えなくなる。
恵子、諦めるように立ち止まる。
恵子「このクソガキがー！」

と、散弾銃を地面に叩きつける。
中年女性達、治郎中年女性、古谷家の玄関から続々と外に出て来る。
中年女性A、恵子に近づいて来る。
中年女性A「古谷さん！」
恵子、振り返る。
中年女性A「大丈夫？怪我はない？」
恵子「ええ大丈夫です。靴が脱げただけなんで、ご心配なさらないでください」
中年女性A、安心する様に息を吐く。
中年女性A「あーそー。良かったー」
と、靴を拾って恵子に渡す。
恵子「本当にすいません。クソガキを逃がしてしまって」
中年女性A「そんな謝らないで。古谷さんは頑張ってるわ」
近くにいる中年女性B、寄って来る。
中年女性B「そうよ」

中年女性C「悪いのはあのクソガキよ」
と、中年女性同士、お互いの顔を見合って、「そうよー」、「そうそう」と言って頷き合う。

○ミニバンの車内
運転している秀樹、助手席の矢部、後部座席の陽葵、亮介、ガッパ淳。
矢部「それにしても、オバサン達は僕達の事が相当嫌いなようだね」
秀樹「おばさんだけの楽園でも作りたいんですかね」
秀樹「だけど、男も子供も排除したら、20年もすればオバサンはみんな消えて、お婆さんばかりの世界になるのに」
矢部「そうか、そういう事か。解ったぞ！」
秀樹「何か思い当たる事でも？」
矢部「おそらく、人類を絶滅させる為の破壊行為、あるいは人口削減計画が実行されたんだ」

秀樹「一体誰がそんな事を？」
カッパ淳、痛そうに体を押さえる。
カッパ淳「痛いっ……」
と、息苦しそうにする。
秀樹、カッパ淳の方を向く。
秀樹「どうしたんだ？大丈夫か？」
カッパ淳「体が苦しいです。熱いっ……」
矢部「水分が不足してるんだ！早く海へ行かないと」
と、アクセルを強く踏み込む。

○峠道

自動販売機がある。
ミニバン、その前に走って来ると急停車する。
秀樹、助手席から降りて、急いで水を買う。
ミニバンの元に走り、後部座席の扉を開ける。

○ミニバンの車内

矢部、運転席から後部座席の方を見ている。

亮介、陽葵、三列目のシートから、二列目のシートで寝込んでいるカッパ淳を見ている。

秀樹、開いた後部座席の扉の外から、ペットボトルのフタを開け、カッパ淳に水をかける。

カッパ淳「痛たたたたた！」

と、やけどしたように暴れる。

秀樹、手を止める。

秀樹「いっ、痛いだって？」

カッパ淳「痛いです」

矢部「もしかして」

と、後部座席の方に身を乗り出す。

指先でカッパ淳の皮膚に触れ、その指を秀樹の口元に近づける。

秀樹「なんですか？」

矢部「舐めるんだ」

秀樹「え？」
矢部「早くしないと彼が危ない。さあ」
秀樹、戸惑いながらも矢部の指を舐める。
矢部「どうだい？」
秀樹「しょっぱいです」
矢部「やっぱりそうだ。淳君には海水が必要だ」
秀樹「海水ですか？」
矢部「おそらく、彼の体の表面は塩分でコーティングされている。だから水をかける事でそれが落ちて痛みを感じるんだ」
秀樹「でも、お風呂に入ってた時は大丈夫だったのに」
矢部「水風呂に入っていた事で、皮膚の膜が浮き上がった、あるいは溶かす事に繋がってしまった。つまり、私達は海の魚を川の中に入れたようなものだったんだ」
秀樹「なら、海水に浸かれば？」
矢部「再生するはずだ。急ごう！」

○峠道

秀樹、急いでミニバンの助手席に乗り込む。

ミニバン、急発進して、自動販売機の前から走り去って行く。

○道路

ミニバン、走っている。

○海水浴場沿いの道路（夕方）

ミニバン、走って来ると停車する。

カッパ淳、慌てる様に後部座席から降りると、海の方へ全力で走って行く。

秀樹、少し遅れて、助手席から降りると、カッパ淳の後を追いかける。

○海・浜辺（夕方）

秀樹、道路の方から走って来ると、呆然と立ち止まる。

秀樹「なんだこれは……」
と、周囲を見渡す。
砂浜には、黒い潜水着のような物が
無数に落ちている。

○海の近くの寂れた駐車場（夕方）
周囲に車は止まっていない。
ミニバン、道路の方から走って来ると
停車する。

○ミニバンの車内（夕方）
運転席の矢部、後部座席の陽葵、
亮介。
矢部「ここならオバサンに見つからないだろう。
よし、行こう」
と、運転席から降りる。
陽葵、亮介、後部座席から降りる。

○海の近くの寂れた駐車場（夕方）
停車しているミニバン。

矢部、陽葵、亮介、海の方へ歩いて行く。

○海・浜辺（夕方）

周囲には黒い潜水着のような物が無数に落ちている。

矢部、打ち寄せる波の前で、黒い潜水着のような物を両手で持ち上げて見る。

秀樹、その隣で腕を組んで立っている。

矢部「ゴムの様だがゴムではない。シリコンのようでシリコンではない。それにしても、重たすぎる。ん？」

と、何かに気づいたように、潜水着を絞ると、大量の水が絞り出される。

矢部の足元に大量の水がこぼれ落ちる。

秀樹「これは、まさか」

矢部「間違いない。これを着ていれば陸地でも海の中と同じ環境でいる事ができる」

秀樹、矢部、海の方を見る。
カッパ淳、海の中から出て来る。
浜辺にやって来ると、その先で砂遊びをしている亮介、陽葵の元に向かう。
矢部「ウミガメを知っているかい？」
秀樹「海にいる亀ですよね」
矢部「そう。彼らは産卵時になると、砂浜に卵を産みつけにやって来る。卵を土の中に埋めたら、海に帰って行く」
秀樹「じゃあ、僕達人間も本当は海に？」
矢部「でなければ」
と、潜水着のような物を、広げて秀樹に向ける。
潜水着は人間の形になっている。
矢部「こんな成人した人間の形はありえない」
と、手を離す。
潜水着のようなものが地面に落ちる。
矢部「本来人間は、成長すると海に戻るんだ」

と、海の先をじっと見る。

○海・浜辺２（夕方）

秀樹、矢部、歩いて来ると、その先を見る。

その先に広がる浜辺に、潜水着のような物が大量に落ちている。

秀樹「なんて数だ……」

矢部「どう考えても、ここでこれを脱いで、海の中に帰って行ったとしか思えない」

秀樹「でも、一体、何をしに来たんだろう」

と、考える様に黙る。

矢部「この感じを見ると、必死に逃げて帰ったようにも見えないか？」

秀樹「オバサン達に襲撃されて逃げたのかも」

矢部「一体、何が起こっているんだ」

と、海を眺める。

○海水浴場・駐車場（夜）

ミニバン、停車している。

○ミニバンの車内（夜）

秀樹、陽葵、後部座席を倒して眠っている。

○海・浜辺（夜）

秀樹、横になって空を見ている。

矢部、その場に歩いて来て周囲を見渡す。

矢部「淳君は？」

秀樹、起き上がる。

秀樹「地上が息苦しいって、今海の中に潜っていきました」

矢部「そうか。どんどん海洋生物に近づいてるみたいだな」

秀樹「淳君は、これからどうなるんですかね」

矢部「解らない。ただ、どんどん私達とは違う生態系になって、共存する事は不可能になるんじゃないかと思える。そうなれば、私達と淳君は他者、敵になるかも知れない」

秀樹「そんな、考え過ぎですよ」
矢部「いや、今の彼は1人だ。陸にいる事ができない。だけど、海の中に仲間を見つけたら、私達よりも近い関係ができる。そうなれば、どうなると思う？」
秀樹「確かに、距離が生まれるかもしれないですね」
矢部「利害関係が生まれるかも知れない」
秀樹「でも、僕達人には友情や愛があるんです。そんな事で崩れる訳がないですよ」
矢部「だから敵になるんだ」
秀樹「だから……」
と、海を見渡す。

○海水浴場・駐車場（夜）
秀樹、古谷、ミニバンの元に歩いて来る。

○ミニバンの車内（夜）
後部座席で眠っている陽葵、亮介。

矢部、運転席に乗り込んでくる。
秀樹、助手席に乗り込んでくる。
秀樹「どうなるんですかね」
矢部「明日になってみないと、解らない」
と、席を少し倒して目を瞑る。
秀樹、少し考える様に正面を見続けてから、席を倒し、腕を組んで目を瞑る。

○海水浴場・出入り口（朝）
雲一つない青空。太陽が光っている。
秀樹、歩いて来ると、浜辺の方を見て立ち止まり、目を細める。
矢部、後から秀樹の元に歩いて来る。
矢部「どうしたんだ？」
秀樹、指を指す。
秀樹「あそこに人がいるんです」
矢部、その方向を見る。
その先の浜辺に、人間の姿に戻っている淳、座って海を見ている。

矢部「ん？……あの姿は……まさか⁉」
と、秀樹と顔を合わせる。
秀樹「どうみても、元の淳君です」
矢部、秀樹、走って浜辺にいる淳の元に向かう。

○海水浴場・浜辺（朝）
淳、座って海を眺めている。
秀樹、矢部、走って来る。
秀樹「淳君！」
淳、走って近づいて来る秀樹を見る。
淳、普通の子供の声に戻っている。
淳「おはようございます」
秀樹、矢部、淳の元にたどり着く。
矢部「一体、何があったんだい？」
淳「何の事ですか？」
矢部「何の事って、その姿だよ」
淳「その姿……、また、何か変わってるんですか？」
秀樹「淳君、気づいてないのか？淳君、普

段の姿に戻ってるよ」
淳「え！本当ですか⁉」
と、立ち上がり、自分の体を見る。
矢部「間違いない。完全に人間の姿に戻ってる」
淳、安心するように笑みを浮かべる。
淳「よかったー」
と、倒れるように座り込む。
淳「戻ったんだー」
秀樹「でも、どうして？」
矢部、淳の隣にしゃがみ込む。
矢部「昨日から今日にかけて、何があったのか覚えているかい？」
淳「昨日は、海の中に潜ったらすぐに眠れたんです。それでまだ空が暗い頃に起きたら、凄く体調が良くなってて、それからずっとここにいます」
矢部「ずっと今まで？」
淳「はい」
矢部「これだけ強い日差しの下にいても問

題はないんだね？」
淳「はい」
秀樹「何が起こったんですかね」
矢部「おそらく、海の中に潜る事で体中に水分が行き渡ったんだろう」
秀樹「淳君、何か変化は？」
淳「昨日までずっと喉が渇いてて、水を飲んでも変わらなかったんです。かなり苦しかったです。だけど海の水を飲んだら、楽になりました」
矢部「となると、昨日の状態は、体が脱水症状に対処して、あの姿になっていたんだろう。だから解決されると、いつも通りの姿に戻る」
秀樹「どういう事ですか？」
矢部「つまり、本来人間は水陸両用なんだ」
秀樹「なら、海水を飲むだけで今までと同じように生活していけるんですか？」
矢部「今の淳君がそれを証明していると思

えないか？」
と、海の前に歩いて行く。
矢部「陸地でしか生きれなくなり、海水を飲めない体になった僕達は、不便で劣った存在。そう思えて仕方がなくないか？」
と、秀樹の方に振り向く。
秀樹「なら、あの落ちていた潜水着みたいな奇妙な物は一体？」
矢部、呆然と秀樹を見る。

○海水浴場・浜辺２
周囲に無数の潜水着の様な物が落ちている。
矢部、それを掴んで見ている。
秀樹、淳、横でそれを見ている。
矢部「確かに君の言う通り、水陸両用の人間にとって、海水があればこんな物は必要ないはずだ。となると、なぜこんな物を着て陸地に上がって来る必要があったのか？」

秀樹達の背後に、浜辺の外から、周囲を囲むように無数の中年女性達が歩いてくる。
秀樹、気配に気づいて、後ろを見る。
秀樹「やっ、矢部さん……」
矢部「ん？」
と、秀樹を見てから、秀樹の見ている方向を見る。
矢部「なっ、何て事だ！」
先頭を歩いている中年女性M、立ち止まって、秀樹達を確認する様に見る。
秀樹、亮介、警戒しながら、気配を消すように、後ずさりする。
中年女性Mの周囲にいる、数人の中年女性達、同じよう立ち止まって、秀樹達を確認するように見る。
中年女性N「あれ、あっ！クソガキよ！」
中年女性M「このクソガキがー」
周囲の中年女性達、その罵声を聞

き、どんどん秀樹達に気づいていく。
「クソガキー」、「このクソガキがー」「このクソガキー」と罵声を放つ中年女性達、どんどん増えていく。
矢部「まずいぞ。これはまずい」
淳「亮介と陽葵ちゃんは？」
秀樹、海水浴場の出入り口の方を見る。
大量の中年女性達、出入り口の方向を塞ぐように、秀樹達の方を見ている。
淳「そんな、せっかく体が治ったのに……」
中年女性達、一斉に秀樹達の元に全力疾走をする。
砂煙が舞い上がる。
秀樹「逃げろ！」
と、矢部、淳、全力で浜辺を走る。
淳、ずば抜けて足が速く、時速６０キロで走っている。秀樹と矢部と差が開く。

中年女性達、周囲から囲むように走って来る。
その背後から、次の波のように、更に多くの中年女性達、浜辺の方へと走って来る。
淳、海の中に飛び込むように潜って姿を消す。

○海面

波の先に浜辺が見える。
秀樹、矢部、浜辺の方から走ってくる。
中年女性達、その背後から全力疾走で追いかけてくる。
淳、少し進んだ海面から顔を出して振り返る。
淳「(大きな声)海の下に宇宙船みたいなものの来てます！」
矢部、足を滑らせる。
矢部「あーっ！」

と、転倒する。
秀樹、立ち止まる。
秀樹「矢部さん！早く！」
矢部、足を痛めて立ち上がれない。
矢部「助けてくれー！」
秀樹、急いで矢部の元に走る。
中年女性達、全力疾走で近づいて来る。

○海水浴場・浜辺
淳、少し進んだ海の中から、頭だけを出して浜辺の方を見ている。
秀樹、倒れている矢部に肩を貸して、海の方に逃げている。
中年女性達、その背後から全力疾走で追いついて来る。
淳「古谷のお兄さん！後に来てる！」
中年女性、矢部に飛びつく。
秀樹、バランスを崩して矢部と共に倒れる。

中年女性達、矢部に暴行を加えながら、上に覆い被さって行く。
秀樹、急いで立ち上がると、矢部を見て動揺するように立ち止まる。
中年女性達、秀樹の元に走ってくる。
淳「古谷のお兄さーん！」
秀樹、海の方に走るが、中年女性達に服や髪を握られる。
秀樹、それでも必死に前に進み、波打ち際まで進む。
中年女性達、次から次へと秀樹の服や髪に掴みかかっていき、秀樹、前に進めなくなる。
中年女性、秀樹の頭を押さえ込み、秀樹、沈められるようにかがみ込む。
淳「古谷のお兄さーん！」
と、引き返そうとする。
秀樹「来るなー！」
淳、止まる。
秀樹「淳君は逃げろ！」

淳「でっ、でも」
秀樹「俺はおばさんに捕まっても死ぬわけじゃない。おばさんになるだけだ！だから今は逃げて、この謎を解いて俺達を元に戻してくれ」
淳「でっ、でも」
秀樹「淳君ならできる。今の淳君は超人なんだ！だから後は任せたぞ！」
中年女性達、秀樹の姿を覆い隠すように上に覆いかぶさっていく。
賢太中年女性、治郎中年女、走ってくると、秀樹の上に積み重なる。
恵子、走って来て、その上を上って天辺に立つと、そこから海面の淳を見る。
恵子「クソガキー！」
と、散弾銃を淳に向ける。
淳、歯を噛みしめてから、背を向むけ、ジャンプするように海面から高く飛び上がり、頭から水しぶきを上げずに海に潜る。

散弾銃の発砲音と共に、その周囲の海面に鉛の玉がぶつかり水しぶきが上がる。

恵子「このクソガキがー！」

と、散弾銃の引き金を引くが、弾が出ない。散弾銃を投げ捨て、中年女性の山から降り、波打ち際の方に行く。

秀樹と矢部の上にできた中年女性達の山。その中年女性達、山を崩すように散らばって、恵子のいる波打ち際に行く。

「クソガキがー」、「このクソガキ」、「クソガキー」、と、叫ぶような罵声を海に向かって浴びせる。

しばらく罵声を放ち続けると、静かになっていく。

古谷秀樹中年女性（45）、矢部貴弘中年女性（48）、その場にやって来る。

秀樹中年女性「残念だけど、もう逃げられちゃったみたいね」
矢部中年女性「仕方ないわ。でも、あのクソガキ、海の中に潜ったまま出て来ないって事は」
中年女性D「コテンパンね。サメに食べられちゃったのかも？」
中年女性達、笑う。
恵子「まあ良いじゃない。海の中じゃ生きていけない。私達の勝ちよ」
秀樹中年女性、矢部中年女性、中年女性達、恵子の方を見ると、全員で拍手をする。
拍手が落ち着く。
恵子「さあ、行きましょう！」
恵子、秀樹中年女性、矢部中年女性、中年女性達、浜辺から引き返して行く。
中年女性A「もう服がずぶ濡れ。嫌だわー」
中年女性B「本当、何年ぶりだろう。海に

入ったの」
中年女性C「でも、こうも熱いと海って気持ちいいわね」
中年女性D「そうよねー。だけど紫外線はお肌の大敵よ」
秀樹中年女性「油断したらシミやソバカスができちゃう！」
中年女性F「みんあいいわねー。そういう事を気にできるから」
秀樹中年女性「そんなー、まだまだ藤田さんも綺麗ですよー」
中年女性F「私なんてソバカスとシミしかないわー」
恵子、秀樹中年女性、矢部中年女性、中年女性達、世間話をしながら、離れて行く。

○海水浴場・出入口
中年女性達、続々と浜辺の方から出て来る。

○海水浴場・駐車場

停車しているミニバン。

亮介、陽葵、車内の後部座席の窓から、外を覗いている。

終わり